
とある原石の幽波紋

呪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある原石の幽波紋

【Nコード】

N6228Q

【作者名】

呪

【あらすじ】

能力を求めていた佐天涙子に、もしも能力が備わっていたら。しかもそれが原石としての力で、更に発現したタイミングが悪かったら。

これはそんな佐天涙子の、奇妙な学園生活の物語。

注意

原作名に『ジョジョの奇妙な冒険』と入っていますが、使用しているのはスタンド能力という設定だけでキャラを出す予定はありません
arcadia様でも連載中

1話

初めまして。

私の名前は初春飾利、学園都市にある柵川中学校に通う中学1年生です。

そんな私と同級生で親友の佐天さんは、いつも来るファミレスでデザートを食べながら、学校で出された宿題に取りかかっています。

ちなみに私の正面でさつきまで唇を突き出してうんうん唸ったのに、店員から出されたチョコレートパフェがきて花が咲くように笑みを浮かべたのが、私の親友でこの話の主人公の佐天涙子さんです。

最近 は本心から笑顔を浮かべてくれますが、初めて柵川中学校で出会った時はまるで仮面みたいな笑顔を浮かべる人でした。でも、それには理由があったみたいでした。

そんな佐天さんと私と、白井さんや御坂さんの物語は今よりもっと昔 初めて柵川中学校で出会った頃から始まります。

「初春？ ケーキの苺もーらい！」

「あつ！ ダメですよ佐天さん！」

目の前の校舎前に広がる有象無象の山。

彼等は 彼女等も居るが 学園都市の判断基準によってこの柵川中学校に振り分けられ、更には柵川中学校側の基準によって振り分けられたクラス分けが書かれた掲示板を確認する人の山だ。

学園都市の中でもこの柵川中学はよくある底辺中学であり、所謂学園都市基準で優良可でふるいにかけて中で『可』にあたる低レベルな能力者を集めた学校だった。

それを更に柵川中学校としての基準　たぶん能力の類似性や男女比？　で振り分けたものがクラス分けになり、それを知らなければ教室に行けないのでこうして私もその１員として人混みに紛れていた。

「はあ……　クラス分けの結果くらい郵送してくれたっていいのに」

最もな疑問であるが、学園都市に入ると外に居る親と連絡はできるが普段会う事は難しく、それこそ長期休暇でも無ければ外に出る事は出来ない。

だが3月から4月にある春休みは学園都市からの外出は認められず、卒業式を観覧にきた親のみ学園都市内に1週間の滞在が認められるのみであり、それならば郵送したけれど居なかったという事にはならず、寮は学園都市で管理しているのだから問題なく連絡できる筈なのだ。

いや、そんな面倒な手順を踏まずとも、それこそ先週の金曜日にやった入学式で渡してくればよかったのだし、最悪卒業式で配られた入学式の日程やらが書かれた手紙に書いてくれればよかったのだ。

「こんな底辺校にはそんな扱いなのかな？　なんせ、私は無能力だしね」

小さく口にして笑みを浮かべ、もう一度その言葉を噛み締めるように口内で小さく転がす。

学園都市で初めて入学した小学校で出された結果は、レベル0の無能力者というレッテルだった。

さすがにレベル5や4は居ないまでも、レベル1や2がそれなりを占める中でチラホラ居るレベル0の1人が私だった。

自分がレベル0だと知って泣く男子もいた。

自分がレベル0だと知って絶望する女子もいた。

そんな中で私こと佐天涙子は静かに俯き、しかしはつきりと口の端を歪め笑みを溢していた。佐天涙子の目的は自身の過去を塗り潰すこと……無かった事を無かった事にする為にレベル0という判決は、レッテルは、診断は、とてもとても重要だったのだ。

思考の海から帰って来た私はその足を掲示板へ向け、視界に入った異物に絶句していた。

「……………花？」

目の前でぴよぴよこと花瓶が歩いて いや花瓶を被った女の子が歩いていて。よく見ればカチューシャのそれに幾つもの花が咲いていて、たった1人でどうにも彩り豊かで華々しいというか賑やかな少女だった。

啞然としながらも自分の髪をすくように撫で、右耳の上あたりにつけた花飾りに触れるが生憎とこの花は1つしか咲いていない。

私が付けた個性的と言ってしまうえば個性的な花飾りも、あくまで差別化として付けた訳ではなく同級生に勧められた時に波風を立てないように、個性をつける結果になりつつもクラスに埋もれる為のものだった。

そこから類推すれば、この少女も周囲から勧められた結果ここまで花が増え……まあありえないけどね。

ありえない妄想に苦笑しつつ、D組に書かれた自分の名前を確認してから教室へ足を向けようと1歩踏み出したその時、偶々さつきの少女が私の前に踊り出てきたのに気付かず踏み出した足は、そのまま止まる事なく前を歩く少女の踵を思い切り踏みつけてしまった。

「はひやつ!？」

「あ、危ない!」

足を踏まれて前へ身を投げ出すような体勢になった少女の肩に、私は咄嗟に手を伸ばそうとするが1拍驚いた分だけその肩に届かずそれを覆すべく無意識に伸びようとした感覚の腕を全力で止めた為に、目の前で少女は「ふぎゃ」っと可愛らしい声と共にコンクリートの地面へダイブしてしまった。

周りは周りでクラス分けに喧々囂々としているが、目の前で転ばせてしまった少女と頬をひきつらせた私はそんな喧騒からは切り離されて微妙な沈黙を保っていた。しかしながら、だからと言って黙っているわけにもいかず私は謝罪しながら安否を確かめる事にした。

「ごつめーん、大丈夫?」

「あう…… あつ、だ、大丈夫です」

倒れた少女の横へ移動した私はそのまま地面にしゃがみこみ、相手の顔を覗き込むようにしてから手を伸ばすと、少女がその手を掴んだので引つ張って立ち上がらせる手伝いをする。

立ち上がった少女の体を上から下まで観察したが、どうやらめばしい傷はまったくないのでまずは一安心であった。

「怪我とかない?」

「大丈夫です」

こちらが悪いのにも関わらず、ふわりと笑みを溢す少女にドキリ

としつつ、私も6年の小学生生活で巧くなつた笑みを表情に貼り付けて安堵した雰囲気をだす。

事実このに怪我がなかったのはいいことで、もしも口煩くつかかってくるのだつたら私達に周囲から視線が向けられ、注目の的として『普通』から外れてしまうことになつただろう。

「ごめんね。　じゃあ、また」

「はい、また」

立ち上がった少女に手を振って踵を返し、目的地である1年D組の教室へ向かつて歩いていく。　玄関に書かれたクラス表記の下駄箱へ寄つて、割り当てられた出席番号の記された下駄箱に靴を放り込んだら上履きに履き替えて、初めて目にする柵川中学校の廊下を進んで行く。

如何に学園都市とは言つても、授業には外と隔絶があつても廊下のそれには隔絶がない普通の廊下で、教室にも1・Dという標識が書かれた普通のものようだ。

もしかしたら、所謂お嬢様学校である常盤台中学やエリート学校の長点上機学園みたいな学校であれば、ことはみまがうばかりの教室があるのかもしれないけど私がそれを見る機会はないだろう。

教室のドアの前に突つ立つていても意味が無いので、私は頭を振つて思考を飛ばすと良い意味でも悪い意味でも選り好みされない程度に柔和な笑みを浮かべ、自然な動作で教室に入ると黒板に示された座席表通りに窓際最後列に着席した。

席の位置としては最高であり、まだ見ぬ担任には感謝の念が溢れるとしか言えない場所だ。

特に授業もまだないので準備する物もなく、タイミングよく近い席はまだ埋まつてないので誰と話すでもなく、こうして窓の外を眺めて暇な時間を享受していたところで私の正面の席で椅子がガチャ

りと引かれる音がした。

その音に気を引かれ、視線を窓の外から正面に向けた私の視界に入ったのは　どこかで見た花瓶少女だった。

「貴女はさっきの……」

「同じクラスだったんですね！」

飴玉を転がすような声とともににはにかまれ、少しだけこちらもその純粹な笑みに引き摺られるように笑みを返す。偶然の再会を喜ぶ彼女に対して、私も偶然の再会と面倒な人物が前の席にならなかった事を口にせず感謝した。

そこからは彼女と自己紹介をしあい　彼女の名前は初春飾利と言うらしい　在り来たりな部分では自分の能力について話して私が無能力者だと言えばわたたと謝り、風紀委員について話せば運動はできないけど情報一点で突破したと恥ずかしそうに話し、その敬語はどうにかならないかと聞けば癖なんですと泣きそうな顔で言われてしまった。

ころころと表情を変えつつも、基本的に絶やさない初春さんのその笑みに温かいものを感じ、いつも以上に私も無意識に笑顔が浮かんでいたのに驚いてしまう。

ここ数年来笑おうと考えて笑みを浮かべていたのだが、無意識に本心の笑みが浮かんだのは本当に久しぶりの感覚だったのだ。

しかしながら、そんな楽しい時間も長くは続く事はなくいつの間にか教室は人で埋まり、教卓には担任の大園先生が立って校則についてやカリキュラムについての話が始まっていた。

諸々の説明を済ませて今は『能力者の心得』を語り始めた担任を無視し、私は手持ちぶさに先程配られた購入する教科書の一覧を

眺めながら時間を潰す。

今の私は無能力者であり、しかも能力者になりたくないの得心得を如何に説かれたところで何の糧にもならないのだ。

心得についての話すら終わり、ここからは出席確認も兼ねた嬉し恥ずかし自己紹介タイムに入る。担任が生徒に与えた自己紹介のテンプレートは、名前のほかに好きなものや趣味といったものの他に自分のレベルと能力についての説明だった。

最後のそれを聞いて微妙な顔をする生徒が何人か居るなか自己紹介が始まり、どうにも窓際の列以外は自己紹介を済ませたがクラスにレベル2は居ないらしく、概算で4割のレベル1と6割のレベル0で成り立っているようだ。

そんな計算をしている内に目の前で立っていた初春さんの能力説明が終わり、顔に似合わず 顔は関係ないが 実はレベル1だった初春さんが座ったのを見て私は席を立つ。

よくある自己紹介をこなしていき、最後の能力についての説明に入る。

周囲から痛いほど好奇の視線を感じる。レベル1からの『こいつは能力があるのか?』という余裕ある視線と、レベル0からの『こいつは能力があるのか?』という卑屈な視線。そして、前に座る初春の心配そうな視線。

自己紹介で恥ずかしそうにレベル0だと言った女子も、俯きながらレベル0と言った男子も私を見る。能力なんていらな……

無能力者は普通の証明なんだから！

「私はレベル0の無能力者です」

背筋を伸ばして胸を張り、私こと佐天涙子はそう言い切った。

2話

私は素の私が嫌いだ。

仮面を被った偽りの私はわたしに無能力を与え、学園都市内では劣等の謗りを受けようと学園都市外で言う『普通』を手にいれる事ができた。

世界最高の頭脳を誇る学園都市の研究者が、私の見えない知らないありもしない力を無能力だと判断したならば、使用者も認めず観測者も認めない力は存在しないことになる。

素の私は無能力者という仮面を手にいれ、やっと『普通』を楽しめるようになったというのに、今日も今日とてこうして私は初春の部屋に来て学校で出されたプリントを2人で仲良く書いていた。

柵川中学で初春と出会ってからはや2ヶ月が経過したが、今までの小学校生活とはかわり私はかなり初春と時間をともにしているのが自覚できる。当然いくら一緒に時間をともにしているとはいえ毎日というわけではなく、私も初春もそれなりに他との付き合いもあるし初春に至っては風紀委員の仕事もある。

だが、そんな忙しい合間を縫ってまであの笑みとともに「今日は一緒に云々」と言われてしまえば断りようがなく、偶に私の素が出そうになるのを全力で仮面で抑え込む日々だった。

こうして考えてみれば、無能力という偽りの仮面を時より剥がそうとする初春と一緒に居る日常が、それこそ私の『普通』になっているのはどんな皮肉だろうか？

「　　って、聞いてるんですか佐天さん？」

声をかけられて現実に戻ってみれば、目の前には頬を膨らませて『私怒ってるんですよ』といった表情の初春が居た。

その顔を見てから視線をテーブルに下げてプリントを覗けば、ま

だまだ書き込みの少ないプリントがある。　どうやら、私はわからない部分の説明を初春に頼みながらも、その説明を聞いていなかったらしい。

「ごめん初春！　ちよつと考え事しちゃってさ」

両手を合わせて謝りながら、私がコンビニで買ってきたひとくちサイズのチョコを手にとって、そのまま包装を剥いて怒る初春の口に放り込む。

口に放り込まれたそれに驚きながらも、甘いものが好きなのか「むー」と唸るのを見ていると、どうやらチョコを買ってきたのは間違いないようだったようだ。

「ところで、佐天さんは何か悩みでもあるんですか？」

「え？　そ、そうかな」

「考え事にしては、その……　深刻な表情でしたよ」

小首を傾げる初春に、私の心臓は大きく高鳴った。　自覚していても止められないが、たぶん今も素の表情になっているだろう。

そして、さっきまで考え事をしている時も素の表情だったんだろう。

初春の屈託ない笑みをみるのは好きだが、自分の醜い素を晒すのは我慢できない。　素をさらけだす事は不幸にしか繋がらないのは過去が物語っていて、そのせいで私は……　いや、考えるのはよそう。

「なんだ初春には私の悩みがバレちゃったかあ」

「そんな時は、私にどーんと相談しちゃってください」

胸を張って私を見る初春に努力しながら笑みをこぼしつつ、勘のいい初春を煙にまくべくここは嘘をつく事にした。

「なんていうか、私は初春のスカートがめくりたいんだよねえ」

「へ？」

言われた事の意味がわからず固まる初春に対して、私も思いつきを口にしたにしては意味の分からない自分の発言に顔を顰めながらも、口にしたならば推し通るのみだと理解不能な理論を口にして如何に初春のスカートがめくりたいかを力説する。

全てから置いていかれたような顔をする初春と、それをわかっていながらも引つ込みがつかずどつぼにはまった私…… 混沌としたと言うよりもまさに滑稽でしかない。

困惑よりも狼狽に近い初春を見ているだけで、私の顔がどんどん熱くなっていくのが冷静にわかるのだが、そんな冷静さは何処吹く風だとばかりに口はヒートアップして意味不明なことを口走る。

「あああ、ストップです佐天さん！」

ついに耐えきれなくなった初春が挙動を乱し、両手でバンバンとテーブルを叩いたのを聞いてやっとこさ私の口も止まり静寂が部屋を支配する。顔をリンゴのように赤く染めた初春を見て、とにかくこのタイミングを逃すべきじゃないと期待して私はこう言った。

「あのね初春…… 今のは全部嘘だから」

そろそろ暑くなってくる陽気ではあるものの、陽が暮ればさすがにまだ暑くなくなる今日このごろ、私達は初春の部屋を出て夕食を食べるべく近くのファミレスへ向かっていた。

どうにも間抜けなやり取りは想像以上に時間がかかっていたようで、既に夕食をとるにはいい時間になっていた。

ちなみに、先導する初春は「そんな嘘をつく佐天さんなんて嫌いです！」とぶんぶんしていたが、なんとかデザートを1品奢ることを条件にその怒りを沈めてもらうことに成功している。

財布にダメージを受けることになったが、不機嫌な初春というくらいならば安い損失かもしれない。

ただ、腑に落ちないのは初春の不機嫌なポイントが私の嘘を云々といった部分であり、まさかないとは思うが嘘じゃなく本心からスカートをめくりたいと言って欲しかったんだろうか？

もしもそうだとしたら、私は初春の期待に応えないといけないなという間違った結論に至り、初春に対する所謂スカートめくりの癖がここから始まるのだが被害者が事の発端だと知る者はいない。

とまあこういった具合に本人が事実を知れば呪いたくなる事項の1つが決まるといういたましい事件が起きてはいたが、それ以外は初春の機嫌が悪いぐらいしか日常と変わらず、大通りを普通に歩いていたのだが前を歩いていた初春が急にピタリと足を止めると、何かを気にするように辺りをぐるぐると見回し始めた。

「どうしたの初春？ まさか…… 迷子にでもなった？」

「ちつ、違いますよ！ 今なにか聞こえませんでしたか？」

怒るように腕を振る初春にごめんごめんと謝りつつ、私も初春に倣って周囲に耳を傾ける。

聞こえて来るのは学生の笑い声や車の音などの都会の喧騒。そ

して

「…メエ！ 金……言……つて……る！」

なんともドスの利いた声が聞こえてきた。

全てが聞こえてくるわけではないが、自分達の左側にあるビルの建設現場から断片的に『金』やら『財布』やら『出せ』やら『置いていけ』といった単語が聞こえ、更には工事現場の入り口は不自然な隙間を残して開いていた。

そこまでヒントが与えられれば答えに至るのは容易であり、真剣な表情の初春は今日は非番にも関わらず当然のように腕章を取り出してつけると、微かに浮かんだ小さな欲望に駆り立てられるように私の顔を直視した。

「佐天さんはここに居て下さい！ 私は風紀委員として中に入ります！」

「ちょっと、危ないから警備員を呼んだ方がいいって」

この初春自身が現場に飛び込むというセリフを佐天は会った事がないが、もし風紀委員で同僚の白井が聞いたらどんな表情をするだろうか？

別にそれは初春が風紀委員の仕事に興味を持たず、いつも仕事をサボって働かないというわけではなく、むしろ自分の能力を正しく理解した上で現場での仕事は自身に向かないと考えているからであるが、だからこそ警備員などの応援を呼ばずに自ら渦中に向かうというセリフは異常だった。

この時の初春に名誉欲や功名心があつたわけではない。ただ、少少だけ友人である佐天の前で風紀委員らしい所を見せたいという、ほんの僅かな見栄があっただけである。

「……本当に大丈夫なの？」

「私だって風紀委員ですから！」

真剣な表情でもう一度念を押すように初春は佐天に『危険だから中に入るな』と伝えると、不安気な表情を浮かべる佐天を背にして工事現場の中へと飛び込んで行った。

佐天からしてみれば、初春の事を信頼していたがそれでもこういった面では信用できなかった。

周知の事実であるが初春は風紀委員である。そして、風紀委員と犯罪者等が大立ち回りをして捕り物を行なっているというのは、この学園都市で生活していれば頻繁とまではいかないまでもそれなりに目にするチャンスは多い。

そんな大立ち回りは当然能力者同士の戦いであり、火や電気等の自然現象から念動力や空間移動などの目に見えない能力を用いて鎮圧されているのだが、その点からして初春の能力は言ってしまうえば保温であり戦闘の役に立つとは到底思えなかった。

更には体育の授業をすれば一般人の佐天よりも体力がなく、この点も佐天を不安にさせる要因である。

だから初春という人物を信頼しているが、その能力を信用していないので止めようとしたのだが止めきれず、今は入り口に隠れて中を覗くに留まっていた。

こうして覗いていて思うのだが、どうして私はここまで初春に入れ込んでいるのだろうか？

今まではこんな事はなく、日常会話以上のことや関わりを波風立てない程度に拒み、いつだって1人で行動してきたはずだ。それなのに、私はこうして頼まれていないのに相手を心配し、あまつさえ中に入ろうとする初春を止めようとまでしていた。

そんな自分が不思議で不信で不快で不安だった。心の奥底で素

の自分が鎌首をもたげ、虎視眈々と浮上を狙っているかのように今の私は不安定な精神だとわかってしまう。

どうすればいいのかわからない……　どうしたらいいのかもわからない。

視線が追うのは壁際に踞った男子を踏みつける男に、初春が風紀委員だと名乗っている所だ。　まだ鉄骨が組んであるだけでそんなに広くない工事現場には、暴力を止めて大人しくするように言う初春と急にそんなことを言われて笑いだす男の声が響くだけである。

「あんまりふざけた事を抜かすなよ嬢ちゃん」

「そ、その足を退けて大人しくしてください！」

遠巻きに見ているだけでも初春の声が震えているのが理解でき、男もそれがわかるからこそ余裕の態度を崩さず笑いながら初春を睨む。

「こつなりたくなかったら、失せな嬢ちゃん」

右手を初春の方に向けたと思ったら、その手からぱたぱたと水がこぼれ始めたのが見えた。　そして、水が垂れる右手を払うように鉄骨目がけて手を振ると　飛んだ水滴はまるで鉄骨が何の障害でもないかのように、穴を開けて重厚な鉄骨を蜂の巣にしてしまった。　これが人体に向けられたなら、鉄骨より柔な体がそれを防げる筈がない。　それでも初春には退くことはできなかった……　見ず知らずの男子の為に、後ろで様子を窺う佐天の為に、そして自分の内に秘めた風紀委員という矜持の為に。

3話

明らかにこちらを見下して嘲笑う男に対して、こういった場面に慣れていない初春は内心で既に泣きそうだった。

風紀委員とは学園都市の治安を守る組織であり、その名前だけでもかなりの抑止力になるものでもある。だから初春は甘過ぎる樂觀をもつて現場に入り、こうして代償を払わされていた。

考えればすぐにでも理解できる事だが、偶にはあるが同僚の白井などが風紀委員として警邏に出た結果、生傷を拵えて帰ってくる事から風紀委員の名前は絶対的な抑止力にはならないのである。

「さつさと失せな嬢ちゃん。俺は女には手を出さねえし、こいつだつてよ！」

男はそう言うってから男子の頭を踏みつけると、にやにやと笑みを浮かべて「別に最初から金を払えば暴力なんてふるわないさ」と嘲る。

言葉で相手が罪を悔い改めない時点で、正しく初春は詰んだといつていい状況だった。それこそ戦闘に役立つような能力があったならば、力を振りかざして相対する男を止めようとする事ができるのだが、いったいぜんたい熱くなると本人が持てなくなる定温保存をどうやって戦闘に役立てればいいのか？

だけど、そこまで理解してなお初春には退くなんて事はできなかった。もしもここを退けば男子は更なる暴力を受けるのは明らかで、そもそもこういつた事から一般生徒を守ることこそが初春の所属する風紀委員の本文である。

「ダメです！ 大人しく捕まって下さい！」

決意のこもった言葉が引金になり、先程まで乾いていた男の右手

にまた空気中から水分が集まり始め、ぽたりぽたりと水滴が垂れだした。

それはついさっきデモンストレーションで見せられた現象の1つであり、その後の圧倒的な破壊を行う準備段階の1つだった。

手から水滴を垂らす男は凶笑とでも言うべき笑みを浮かべると、ゆっくり見せつけるように右手を初春に向けて照準を合わせた。

「交渉は決裂だ。とりあえず、死なない程度に寝ときな嬢ちゃん」

立ちふさがるならば容赦しないと男は右手を振り、デモンストレーションほど荒々しくないまでも振り飛ばされた数滴の水が確実に初春の足を目掛けて飛んでいき、腿や膝に小さな、しかし貫通した穴を幾つか開ける。

「いつ…… あう！」

膝から力が抜けるように地面に倒れ伏す初春を、私は外から何もせずに黙って見ているしかできなかった。

微かな呻き声を上げる男子や痛がる初春が手を伸ばせば届くそこに居るのに、自分を無能力者として正当化する為に初春が怪我をしているのに手を出さないで、遠くからこそそと眺めているのが私の求める『普通』のありかたなのだろうか？

一般学生としての『普通』ならば、ここで危険に飛び込まずに離れているのが正解である。

ただ、こうして私はふつふつと沸き上がる不思議な気持ち……

この初春と友達でありたいという小さな気持ちの前では、黙ってここで見ているのが正しい『普通』なんだろうか？

今にも男が倒れた初春に向けて、今一度その手から水滴を飛ばそうとしているのを黙って見ているのは、私の求める『普通』とは相反するなにかである！

「ダメエエエエ！」

「さ、佐天さん！ 逃げっ」

「死にな嬢ちゃん！」

工事現場に飛び込んだ私は、倒れた初春を庇うように水滴を飛ばそうとする男と対峙する。目も開けられないくらい怖いけど、それでも両腕を横に広げて立ちふさがる初春を守ろうとする。

鉄骨を貫くよう水滴を私に防ぐ術はないが、ここで今更初春を捨てて逃げるだなんて選択肢はなかった。

ぎゅっと目を瞑り、痛みが来るのを待ち続ける。しかしながら、恐怖すべき痛みは一向に訪れず、むしろ私の前に立っていた男が狼狽する声が聞こえてきた。

「なっ何故だ！ てめえなにしゃがった！」

肉の壁にでもなつたつもりの女に対し、無駄な足掻きだとはかりに侮蔑と嘲笑を投げかけて能力を使って水滴を飛ばした結果は、全く本人の予想だにしない結果をもたらした。

どんな能力を使ったのかはわからないが、こちらが飛ばしてやった水滴は全て当たる前に弾かれ、何の被害も引き起こすことなく消えてしまったのだ。

ぎょろりと立ちふさがる女を睨むが、後ろに倒れた女を守ると言わんばかりに両腕を広げ、こちらの能力の発動をみる事もなく黙って目を瞑っている筈である。

可能性としては自動で発動する能力の類いだが、眉唾物の幻想御手で力強くなつた自分の能力はレベル4以上になつただろうと自負している。だからこそ、こうして防がれるなんて想像していなか

った。

「ちっ！ 意味不明な能力を使いやがって」

今の今までは殺さない程度に小さな水滴を足元目掛けて飛ばしていたのだが、敵がそれを防ぐのならば大きな水滴を使って見えない壁を喰い破るのみである。

手のひらを上に向けて溜めた水は力の源であり、そこから打ち出される水は破壊の使者でしかない。水が溜まれば溜まるだけ力は増していき、この水は確実に女の力を打ち破り地面に平伏すだろう。

「黙って倒れとけ！」

まだ微かな冷静さはあるが余裕のない声で叫ぶと、今度こそ手加減抜きで殺すために能力を使って水の塊を飛ばしてやる。

全力の1撃は誰にも止められない筈だと確信し、3つに増えた財布がいくらくらいになるのかと算段を始めようとして、呆気なく飛ばした水が弾かれた事に目を見開いた。

弾かれるなんてあり得ない。あつてはならないそれを、目の前の少女は驚愕の面持ちのまま消し飛ばす。

それを見るかぎり、水滴を防いだ本人も防げたことは本意ではないらしいなと、思考の片隅に掠めた。

そう、実際に佐天は自分を狙っていた水滴よりも、それを防げたこと 防げた要因に驚愕していた。

佐天と目の前の不良との間には、佐天にとって忌まわしも恐るべき亜人が中空に浮かんで拳を突き出していた。

2人の間に浮かんだ亜人は骨と皮しかないかのような細身で、顔には潜水服のようなゴムを被っており鼻はなく、目と口は糸で縫われて開かないのっぺらぼうに近い存在だった。胴は5本の棒が腰まで伸びる格子のような空洞になっていて、右肩と左肩には割れた

ハートマークが半分ずつ着いていた。

浮遊する亜人の身長は160cmであり佐天と同じ身長である。

「なっなんで全身が？」

「て、てめえ何言ってるんだ……？」

佐天にとって忌まわしき亜人は記憶の姿をそのままに、記憶と全く違う形で眼前に現れていた。今までの数少ない発現では顔や腕だけが微かに現れるだけだったといったものの、何故か今はその全身が現れてそこに存在している。

いや、困惑した表情で何も無い中空を探す男の行動からして、やはり佐天にしか見えていないことを考えれば、現れたという言葉は正確ではないのかもしれない。

対峙する男には見えていないが、亜人は両の拳を握りしめて戦闘の構えをとっているものの、自らの意思は無いのか反撃などはせずに黙っているのみである。

こんな状況は当然男としては想定したものと違い、予定ではとうの昔に地面へ這いつくばらせて3人分を増えた財布を奪って遊んでいた筈である。だからこの状況に焦れたのか、新たな闖入者

佐天達からすれば救世主だが　に気付かなかった。

「もういい！　てめえら纏めてぶっ殺してやる！」

制御を放棄して威力のみを追求したそれは、今まで飛ばしていたのが狙いをつけやすくする為の小さな水滴ならば、これは全てを薙ぎ払う濁流の如きものであった。

そんな濁流を避ける術は佐天にも亜人にもなく、それでも初春の前から退かずその身を壁として背後で倒れた彼女を守ろうと不退転の意志を見せた結果　濁流は音をも上回る白い閃光によって酸素

と水素に分割されてしまった。

「…………え？」

工事現場の入り口から放たれた雷は閃光として佐天の目をやいたが、次に目を開いた時には迫り来る濁流は跡形もなくなっていて、男も雷にやられたのか身体を痺れさせて地面に横臥していた。

「大丈夫？」

「…………はえ？」

口に出してから後々冷静に考えてみれば、助けてもらった側が出すべき言葉ではないのだが、混乱の坩堝に陥っていた佐天は『ありがとう』でも『大丈夫』でもなく、状況に置いてきぼりにされ間抜け面を晒して口を開いているのみである。

そんな佐天を見て安心した所へ、新たな火種が飛び込んでくる。

「風紀委員ですの！」

工事現場に新たな声が響く。今までは気絶している男と新たに現れた少女の5人しか居なかったのだが、声を出すまで誰にも気付かれず、かつ音もなくツインテールの少女が工事現場という空間に出現した。

比喩でも例えでもなく、まさしくこの空間に現れた少女は現場を軽く見渡し、気絶した男と膝を着いて啞然とした佐天と電気を帯電した少女しか見ていないが、現場の状況を理解したのか、気絶した男にため息を吐く。

「お姉様あ！」

「ちょ、ちよつと黒子！」

新たに現れた少女は、途端に相好を崩すと猫なで声を出してからぴたりと目的の人物に抱きついた。

「こんな場所で会えるだなんて、黒子は黒子はやはりお姉様と赤い糸で結ばれているんですね！」

前言を撤回するが、どうやら新たに現れた少女は現状を理解できていなかったようである。

「そんなことより、その子が怪我してるんだから！」

「へ？ あ…… う、初春ですよ！？」

佐天の視界の中心に収まっていた少女は、初春が倒れているのを見て動揺した声をあげると、ヒュンと音もなくその場から消えてから初春の元へ現れ、そのまま今度は初春とともに 最初の被害者の少年も一緒にだが 消えてしまっていた。

あまりの早業に佐天は閉口するしかないが、目の前の恩人はそんな少女をやれやれといった雰囲気ですりと笑うと、膝を着いたままの私に右手を出した。

「立てる？」

「あ、ありがとうございます！」

助けてもらってから随分と遅くなったお礼を口にして、出された右手を掴んで佐天もゆっくりと立ち上がってから膝の埃を払った。

「助けてもらってありがとうございます。その、私は佐天涙子です」

「私は御坂美琴、よろしくね」

ここで初めて、佐天涙子は念願のレベル5と出会う事となったのだった。

4話

事件の被害者として倒れていた少年と、同じく事件に気付いたものの被害者になってしまった初春を病院に運んだ風紀委員　レベル4の空間移動能力を持つ白井黒子は、事件のあった工事現場に戻って来たのだが現状に目を見開いていた。

それは、手を引かれて儂げながらに笑みを溢す佐天に心惹かれてではなく。

それは、手を引く力が少し強すぎた為か、バランスを崩してよけた佐天を抱き止める御坂に心惹かれて　でもなく。

倒れて気絶している犯人が、そつと当ててある御坂の爪先から意識を戻して起き上がらずに気絶し続けるように、それでいて後遺症は残らないようにと慮られて定期的に電気を流されているのを見て、『お姉様にあそこまで気にされている』と検討違いな感想を抱いただけである。

これ以上はさせてなるものと、くわりと目を見開いた黒子は気絶した犯人の間接を過剰に極めながら手錠をはめ、初春を庇つていたことから御坂と抱き合う行為に目をつぶっていた少女に声をかけた。

「わたくし風紀委員の白井黒子ですの。　初春を庇ってくださいありがとうございますわ」

「いえ、私は……　何も出来ませんでした」

友人を救うという大事をなした佐天だが、結果はまさに散々であったためか表情には固く苦々しいものだった。　佐天からしてみれば、今の胸の内を巡るのはまさしく悔恨のみなのである。

もしも、工事現場に入る初春を止められたら初春は怪我をしなか

ったんじゃないか？

もしも、もつと早く自分が割り入っていれば初春は怪我をしなかったんじゃないか？

そもそも、今日勉強の為に初春を呼んでいなければ怪我をしなかったんじゃないか？

ぐるぐると回るそれは、ただただ鬱屈とした感情を佐天涙子に流し続けるだけだったが、そんな佐天を見て伝えるべきは伝えるためにと黒子は口を開いた。

「貴女が結果や過程をどう思っているかは関係ありません。わたしは風紀委員として、いち初春飾利の友人として貴女の勇氣に感謝しているんです」

「そうよ。佐天さんが庇ってなかったら、もつと酷いことになってたかもしれないだし、ね」

珍しく至極まっとうなことを言っている黒子に驚きつつも、ここぞとばかりに美琴も黒子の言葉を援護するように佐天に声をかけ、初春の怪我の具合がわかったら連絡する為にメールアドレスを交換すると、黒子と美琴は　美琴は最初断ったが　風紀委員の支部へ犯人を連れて消えたので、寂しいながらも佐天はゆっくりと工事現場から出ると部屋に帰ることにしたのだった。

部屋に帰った佐天の元へ最初に来たメールは、初春の怪我の具合を綴った白井からのメール……　ではなく、白井に急かされながら自身の怪我の具合を綴った初春からのメールだった。

内容は要約してしまえば『怪我は軽いけど、明日は学校を休みます』といったものでしかないが、その文面を見て心底安心したのも

事実である。

帰り際に買ってきたパンをかじりつつ、怒濤というには少しばかり重たい事件を振り返る。初春本人談によれば、怪我が酷くないことはまだ救いの要素だったが、佐天としてはむしろ問題なのは全身が発現してしまったその能力だった。

感情ではあり得ないと、全身が発現するだなんてことはあり得ちゃいけないと虚しい理論を展開するが、そんな理論はただの現実逃避でしかなく頭は既に諦観に包まれてしまっている。

ただ、それでも叫びたかった。私は無能力者だと、レベル0の落ちこぼれでしかないのだと。

水滴で鉄骨に穴をあけるような力も、あっちこちに空間移動するような稀少な力も、ましてや電気を飛ばすようなありきたりな力すら持つてはいないのだ。

これは、能力開発について権威ある学園都市が発行したレベルによつて保証されていて、当然学園都市に入つて いや、より正確に言えば捨てられてからか 最初の身体検査でレベル0の無能力者だと宣告され、今もこうして身体検査の度に無能力者という免罪符ならぬレッテルを貼られ続けている。

それに、あの場で白井黒子と御坂美琴と軽く話したが、電撃で私を救ってくれた御坂美琴は私の能力については何も言及しなかった。観測者が居ないそれは、やはり能力じゃないのは必然である。

「……はあ。 寝よ」

時間としてはそれなりに早い、ネガティブ一直線の思考では特に何かに手がつくようなことはなく、たぶん夢見は悪いだろうなあとため息を吐いて佐天涙子はベットへ潜り込んで行くのだった。

はあ…… はあ…… はあ……

暗い暗い精神維持工学研究所の1室で、目を充血させた少年は息を漏らさず隠れていた。

既に玄関から聞こえてきていた爆音や轟音は鳴りを潜め、耳に当たてある無線機からは悲鳴もなく不気味なノイズのみが溢れている。おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしい！

俺はつまらない仕事でしかないが、いつも通り下請けの下請けでしかない『キャンディー』に舞い降りた仕事をする為に、こうして精神維持工学研究所にメンバー5人で押し入り強盗をした。

それで、研究室に残ってた2人と宿直の警備を処分してから、目的の資料とやらを探し回ってたところへ襲撃がかかりやがった！それも、レベル5が何で来やがるんだよ！

「『キャンディー』のリーダーは、超諦めて出てきて下さい」

「どれだけ逃げたって、結局死ぬのは同じな訳よ」

静かになった廊下に死神の声が響くが、その声質は軽く少女の声でしかないだろう。だが、チラリと窓から見えたあれは『アイテム』のリーダーだった筈だ……。以前他所の組織が研究所を潰し、その下請けとしてガサ入れを任された時に映像資料としてあの『原子崩し』の顔と力は見ている。

今まで銃と能力でそれなりの鉄火場をくぐって自分の力に自信があったが、あれを見たらレベル5とレベル3じゃ大砲と豆鉄砲でも割りにあわないのが嫌でも理解できてしまった。

あり得ないだろクソツタレ！ 何でレベル5が出張って来るんだよ！

確かに『キャンディー』からしてみれば、所謂レベル5のお膝元である『アイテム』の情報なんてものは扱える機密ではないが、そ

もそも『キャンディー』にガサ入れが回った時点でそれくらいは知られていって判断が出たんじゃないのかよ！　そもそも、半年前の話じゃねえか！

自分の隠れている部屋である被験者待機室は、精神維持工学研究所の2階に作られている。襲撃を受けて窓から『原子崩し』をチャリと見てから、メンバーには何も言わずにここへ飛び込んで隠れているのだが、外からは俺を探す声も聞こえなくなっただから隠れおせたのだと、レベル5から逃げ切れたのだと安心してベットの下から這い出て、部屋の出口を見て息を飲んだ。

「メ、『原子崩し』……　どうしてここに！」

「……あれだけギヤアギヤア1人で騒いでおいて、本当に気付かないと思ってるの？」

これから死体になる人物と話す趣味は麦野に無いが、それでも最後の言葉にするにはあまりにもあんな言葉に返答してしまう。

そんな呆れ果てた麦野の返答を聞いて、しまったとばかりに口を塞ぐ雑魚を見て嘲笑がわきあがって来てしまうのはしょうがないだろう。　だがまあ、時間の無駄を省く為に能力を発動しようとしたところへ、折半詰まった声が割りいる。

「ま、待ってくれ！　俺達がレベル5のアンタが出張するような何をしたってんだ！」

「理由ねえ」

反撃の機会を狙っているのかもしれないが、いつもならここで入りそうな命乞いがなかったせいか、能力を止めて少し気になる事を聞くために口を開いてしまう。

「ところで聞きたいんだけど」

「な、なんだよ？」

「何で『ソルト』の下部組織のあんたらが『キャンディー』なのよ？」

「は？」

ちよつとした疑問だったのだが、何故あえて塩の下請けに飽がいののか……　せめて塩じゃなくて砂糖じゃないのかと益体もない疑問を口にする、特に答えは求めていないのか止めていた能力を發動させ、間抜け面を晒した標的の上半身を消し飛ばす。

最後の1匹を消したので仕事は終わり、久しぶりの運動を済ませて麦野は背筋を猫のように伸ばした。

殺された相手には不幸でしかないが、最近絹旗やフレンドに仕事を任せ過ぎたせいか運動不足だった体には丁度いい運動とばかりに、レベル3が最大の弱小組織退治に本来なら過剰戦力の麦野沈利が出張って来ていたのである。

それも、たまたま居たアジトから10分の距離だから来たのであって、15分以上かかる距離だったならば麦野がここに現れる予定はなかったのだ。　まあ、麦野が来なくても標的が死体になるのは確定事項にすぎないのだが。

綺麗な2階の廊下を歩き階段を降りると、そこには吹き飛んだ家具やら壁や天井の焦げやらといった破壊の痕跡と、不幸にもその破壊の只中に身をおくことになってしまった『キャンディー』の構成員が爆散してバラバラ死体になっていたり、壁や天井にめり込むように死んでいたと言ったシニールレアリスムも裸足で逃げ出す地獄絵図がそこにはあった。

「帰るわよ」

そんな日常とはかけ離れた日常を享受して生きてきた麦野からしてみれば、最後の1人になるまで自分が暇そうにして待っていたからとはいえ、ここまで建物が建物として残っているのは久しぶりである。なんせ、自分の能力は如何な材質でできていようが壁程度では止められず、普通に能力を使っても建物が蜂の巣になってしまふのだ。

とにかく、とても簡単でつまらない仕事だったが、気分転換には丁度いい運動量にはなった。惜しむらくは

「……運動してお腹が空いた訳よ」

夕食の時間に差し掛かってきたからか、全員の体が空腹を訴えてきていることだろうか。

いの一番に口を開いたフレンドの鶴の一声により、死体処理部隊と入れ替わりにこれからファミレスへ向かう事を決め、アジトで留守番をしていた滝壺へ先に行って席を確保しておけと電話で伝えると、ふわふわとした滝壺が面倒の種を口にした。

「むぎの、次の任務がきた」

5話

初春飾利は今、最高に混乱していた。

あの日の怪我は、既の後遺症どころか影も形もなく、昨日には足に巻いていた包帯すら外せている。

そんな初春に対し、佐天が完治祝いだとファミレスにデザートを食べに行こうと誘い、風紀委員への復帰は来週からなのでこうして初春は学校帰りにファミレスへ寄ったのだが、その時には誘った佐天が苦笑していることに気付けないでいた。

お喋りしながら2人でファミレスに入り、空いていた4人がけの席に座ってデザートを注文したところで、初春は自分達の席に近づいて来ている人物を見て驚いた。学舎の園ではよく見るだろうが、第7学区ではまずお目にかかれない常磐台を着こなしたツインテールの少女、そう

「怪我はもうよろしいんですの？」

「……白井さん？」

初春の記憶が正しければ、今日の白井は風紀委員の仕事だった筈だが盾をモチーフにした腕章はなく、まるで悪戯が成功した少女のような笑みを浮かべてから、ついと右に移動して後ろに隠れていたもう1人を初春におめみえさせる。

「あつ、貴女は！」

ネット上で何故か少ないレベル5の情報の中で、唯一情報にプロテクトがかからずオープンに開示された超能力者……常磐台に在籍し、汎用的で数が多い電撃使いでありながら学園都市230万人

の頂点に立つ1人であり、前から風紀委員の支部で白井に会いたい会いたいと懇願していたその人である。

「えっと、私に会いたかったんだって？」

「みつ、みみみみ御坂美琴さんですか！」

思いもよらぬサプライズゲストの登場に、席から飛び上がった初春は周囲に他の客がいないかのように、大声を出して驚いてしまう。そんなテンションがだだ上がりな初春を見て佐天も釣られて笑みを浮かべ、苦笑しつつもため息を吐く白井の隣では今更ながらサプライズにするため、佐天にメールで自分が行く事を秘密にしておいてと頼むべきじゃなかったなあ……と、迷惑そうな顔をしてこちらに寄って来た店員を見て御坂は後悔していた。

完治祝いは開始早々に店員からの注意が入るというアクシデントがあったものの、頼んだデザート　御坂と白井の分も佐天が注文済み　さえ出してしまうば、甘味に舌鼓を打っている間につつがなく進んでいく。

とは言うものの、実際には『初春の完治祝い』ではなく、『初春による御坂への質問大会』の様相をているほど初春が御坂に質問を続け、それを苦笑しながら御坂と白井が答えるだけになっていたのだ。

「それにしても、御坂さんが来てくれるって教えてくれないなんて、意地悪ですよ佐天さん」

「洒落たプレゼントだったと思うんだけどな」

矛先がそれたので、やっと御坂も目の前でお預けになっていたプリンアラモードに手をつける。だがしかし、止まらない質問に答え続けたせいか、プリンに乗っていたアイスクリームが半分以上クリームに戻ってしまっていた。

溶けたクリームを絡めたプリンを口に含み、何とはなしに御坂は何故サプライズになったのかを初春に伝えてしまった。

「あ、それは私が佐天さんにメールで頼んだのよね」

「へ？」

何を言っているんだろうとばかりに首を傾げる初春だったが、段々と御坂の言葉を正常に咀嚼できるようになったようで急に俯きながら、沸々とわきあがる気持ちに押されて隣に座る佐天の肩を掴むと全力でシェイクを開始した。

「さささささ佐天さん！ さっ佐天さんは、御坂さんのメールアドレスを知ってるんですか！」

ぐわんぐわんとシェイクされて目を回す佐天には、正直に言ってもりまくる初春が何を言っているのか理解できないのだが、机を挟んでそれを見ている御坂は自分が地雷を踏んだのだと理解する。

「う、初春さん。私の連絡先くらい教えてあげるから、そろそろ止めたほうがいいんじゃないかな……」

「ありがとうございます！」

御坂の言葉にピタリと止まる初春だが、顔が多少蒼くなってしまった佐天は初春の魔手から逃れると、そのまま机に突っ伏せてしま

う。

「ごめんなさい佐天さん！」

「謀ったわね初春……」

ぐるぐる回る視界と吐き気の残る佐天の目の前には、先ほど新たに追加注文した出来立てのハニートーストが僕を食べてと存在感を主張し、その後ろから先ほどの店員が怖い笑顔で寄って来ていたのだった。

ファミレスの1席は、これから2度目の戦争が始まるかもしれないという緊張感に満ちていた。

席に座っているのは「私は絶対にイヤ」と言って、そもそも会議の参加すら拒否してブランド屋を覗きに行った麦野だけであり、それ以外の『アイテム』の3人は揃って座っている。

昨日は新たに出された任務を誰が承けるか議論した結果、滝壺がフレンダの胸を指差した結果戦争が起こってしまい、決定する前にうやむやに終わってしまったのだ。

「……それで、私は結局滝壺が一番適任だと思う訳よ」

「わたしは……」

難しい顔で滝壺が自信の胸を見下ろした時、2ヶ所からコップがガタツと揺れる音がした。絹旗は「……超将来性が」と微かに口にしたが、それを聞いてフレンダは歯噛みしながら理由を述べる。

「何にしても、能力追跡が一番適任だと思うのよね」

「任務中は『アイテム』自体が非番扱いになる事を考えれば、確かに滝壺が行くのが超適任なんですが……」

「でも、わたしだと調査は難しいよ？」

『さささささ佐天さん！ さつ佐天さんは、御坂さんのメールアドレスを知ってるんですか！』

「って、超うるさいですね」

叫び声がファミレスに響き渡り、絹旗が顔を顰めるがフレンドはそもそもこの任務に懐疑的な立場である。

『アイテム』に出された命令は簡単簡潔なもので、『原石の可能性がある佐天涙子の調査』だけである。 だけであるのだが、ここからが面倒な部分で『なお、尋問や死傷させる事を禁ずる』という1文が続いている。

怪我をさせずに調べたいならば、それこそ自分達ではなく専門家である研究者を使えば済む話だし、誘拐してこいというのならば首輪を嵌めて引き摺ってでも連れて行くことはできる。

それに、『アイテム』には居ないが精神掌握系の能力者を使って聞き出すこともできれば、他にも特殊な調査系の能力者を抱えた組織はあるはずである。

目の前に座る滝壺という少女は非戦闘系の後方要員ではあるが、その能力は調査系ではなく追跡に特化した能力である。 しかも自分や絹旗も調査系の能力者ではないし、レベル5として学園都市230万人を上から数えて第四位である麦野なんて、フレンドが今更確認するまでもなくこういった調査には能力も性格もとんと不向きである。

これが例えば、『スクール』に所属している心理定規ならば聞き出すにはもってこいの人物だし、もしかすると『スクール』に与えられる任務をひっぺがして持ってきたんじゃないかとフレンドの頭をよぎるが、まあさすがにそれはないだろうと小さく頭を振ると、とにかく自分には無理だと　胸はないが身長を見ると吼えるのだった。

フレンドは知らない。　自らが至ってあり得ないとした考えが、実は半ば正鵠を射ていたことを。

いつもの対抗意識から『スクール』の任務を奪ったはいいが、『アイテム』内に任務の適任者が居なくて頭を抱えていた人物がいて、しかも今更キャンセルもできずに電話で滝壺に投げていたことを……　ここに居る少女達は誰も知らない。

ファミレスから追い出されるように出てきた4人は、御坂の提案もありそのままの足で地下街のゲームセンターを目指して進む事になった。　今日を記念してプリクラを撮るとのことだ。

そんな提案を全面的に受け入れたと言うか、喜んで追従した初春を見ていると自分の趣味趣向でしかない部分を口にするには憚られ、こうしてルンルン気分で足取り軽い初春に手を引かれつつ、件のゲームセンターに到着してプリクラの筐体の前に立たされていた。

「これで……　撮るんですか？」

「せっかくだし、最新式らしいしこれでいいと思うんだけど」

目の前にある何のへんてつもないプリクラの筐体には、でかできとロケテストの文字が書かれた看板が掲げられているのだが、残念ながら順番待ちの列はない。

「『新機能として、MRIやCTスキャンでの撮影が可能』って書いてありますけど……　こんな筐体を将来的に病院に置くんですね？」

「そういう意味では、この『骨までくつきり写る！』の文字に嘘偽りは無さそうですね」

口々にこの筐体について話す3人をおいて、佐天は小さく顔を顰めていた。

文明が開花した現代で「写真を撮ると魂が取られる」と言う無知ともオカルティシズムに傾倒したととれる事を言う気はないが、それでも佐天は写真というものが好きじゃなかった。

いや、これには語弊がある。佐天は写真を見る事は嫌いじゃないが、写真に自らが撮られる事は好きじゃなかった。

今までもできる限り自らが写る機会は最低限に抑えてきたが、科学万能の学園都市で口にすべきじゃないがああの人（亜人）が写り込んだらと考えると、何か現実を突き付けられたような気になるかもしれないので嫌なのである。

勿論科学者がAI・M拡散力場を探しても捉えられなかったし、今までの写真に亜人が写った試しはないが佐天は自己防衛の一環として、最低限以外は写らないようにしていた。

「あ、両替して来ちゃうから初春さんと佐天さんはここで待ってて」

「わたくしも着いて行きますわお姉様」

財布を片手に両替へ向かう御坂さんも、みんなで撮る写真を楽しみにしている初春も、写真より御坂さんと一緒に居られる事が幸せそうな白井さんも、みんながみんな笑顔である。

「……今回はしょうがないよね」

写りたくないのはアレルギーのように有害なものではなく、あくまで趣味趣向の領域のじゃない。

こんな状況で、自分は写りたくないと言えるほど佐天は冷めておらず、ふと触れた口の端が微かながら笑みに歪んでいた。

「うん。今回はしょうがない」

6話

つくせる限りの努力はした。慣れないレンズに向かい、こうして4人でくつつくようにして笑みだって浮かべた。

甘い審査基準だと言われるかもしれないが、その結果としてできあかったプリクラに写る私の笑みが、何処と無く不自然にひきつっている印象を受けるのはしょうがない部分なのだ。

だからこそ、私は自分の不自然な笑顔を隠す代償を今支払っていきたりする。

「ひっ、ひひ酷いですよ佐天さん！」

「あはは…… ごめんね初春」

半泣き状態の初春に胸ぐらを掴まれ、先ほどのファミレスでの焼き直しのように前後へ振り回され、視界がぐるぐる回ってくるのがわかる。

何故自分がこんな目にあっているのかといえば、初春が私の胸ぐらを掴みながらも手放さないプリクラに理由がある。

防水や折れ曲がりにくくなる特殊処理をされているものの、写真そのものは普通だ。そこに写っているのも、御坂の胸元に飛び込んだ白井とそれに目をむく御坂、そして努力も虚しく笑みが硬い私と不自然感を消すため何を思ったのか咄嗟にスカートを捲られた初春の4時間だった。

タイミングが良いのか悪いのか、スカートを捲られた瞬間に写真が撮られた初春の表情は、捲られたスカートに気付かずいつもの可愛い笑顔なのが初春の。これは悪い意味だが、テンションを上げる要因になっている。

「もう！ 反省してないでしょ佐天さんは！」

「反省してるってば。それにしても、白井さんも御坂さんもここ
いつちゃったんだろうね……」

いま現在、佐天と初春の2人はゲームセンターから飛び出して、
右へ左へ走った結果としてよくわからない路地裏に立っていた。

何故こんな場所に居るのかと言えば、やむにやまれぬ事情と小さな不幸が重なったからである。

ゲームセンターでのプリクラは、最終的に4人の脱出騒動にまで
発展してしまった。理由は簡単で、佐天のおいたに関する叱責を
初春は主に言葉でおこない、白井のおいたに関する叱責を御坂は癖
で電撃によって行なってしまったのだ。

当然ながら、プリクラの筐体は電撃に巻き込まれてしまい、断末
魔代わりに煙を吹いて沈黙してしまったのだ。

それを理解した4人は一瞬思考が麻痺したが 1人は物理的に
麻痺させられていたのだが 現状が理解できずに呆けている初春
よりも、やっちゃったようしようと言いつつ顔に書いて固まる御坂よりも、
そして思考どころか手足すら痺れて沈黙している白井よりも早く、
佐天は現状を受け止めて行動に移っていた。

「初春！ 御坂さんは白井さんを！」

まだ呆けている初春の手を掴みながら、御坂に白井を任せてゲー
ムセンターの外目指して走り出す。

咄嗟に動けない御坂を放置し、壊れた筐体から踵をかえすのと警
報が鳴るのは同時だったのだが、やっと警報をスタートの号砲とし
て御坂は白井を担いで逃げる佐天を追いかけた。

ゲームセンターから飛び出した佐天が、逃げるために路地裏へと入って行くのを見て御坂もそれを追いかけて路地裏へ入っていく。だが、ここで先行する佐天と追走する御坂は、焦りと不幸が重なり大きな失点をしてしまった。

先行した佐天は路地裏に入っても走り続けず、後ろから来る御坂と合流するべきだった。後ろから追いかける御坂も御坂で、路地裏に入ってから前を走る佐天を呼び止めるべきだった。しかし、格言が後世に残るよう『後悔先に立たず』である。

当り所が悪かったのか、それとも御坂に担がれる事で長い時間御坂の体温と匂いを感じて酩酊していたのか、もしくはその両方なのかはわからないが微かに残った白井の理性に『お姉様が何かから逃げています』という言葉のみが残り、ついうっかり能力を行使してしまったのだ。

音も残さず自分達を残して消えた2人に気付いたら佐天は、最初こそ驚愕しかなかったが段々と理解が及んで沸々と沸き上がる怒りから、走っているの口には出さないが内心語彙の限りを尽くして口汚く罵っていた。ちなみに、初春は佐天に手を引かれて走るというオーバーワークを課せられているため、後ろに居た2人が消えたことに気付いていない。

こんな逃走劇は、人並みの体力しかない佐天はまだしも人並み以下の体力しかない初春には不可能に近く、遂に何度目かわからない曲がり角で足を止めてしまった。

「はあはあ…… も、もう走れません」

「……初春」

足を止めた初春の代わりに曲がり角から後ろを覗くが、どうやら幸運にも追っては居ないようである。

現在はまだ2人とも知らない事だが、ゲームセンターで警報は鳴

ったのだが追っ手は出ていなかった。実はあの筐体に搭載された新技術のMRIは未だに認可のおりていない方式を使用しており、警備員にも風紀委員にも人体実験として使っていた機械が壊れたとも言えず今頃は研究者一同で涙を流しているところである。

当然それ知らない初春は不安そうに周囲をきよるきよる見回し、ついに御坂と白井の2人組が居ない事に気付いた。

「白井さんと御坂さんが居ないですけど、2人とも大丈夫でしょうか……」

初春のその言葉を聞いて、怒りが再燃した佐天は2人を罵る言葉を口にしようとしたのだが、心底2人を心配している初春の顔を見たら喉元で言葉が止まってしまふ。こんな初春を悲しませる事を避けなくなつた自分に驚きながらも、何とか気の無い「2人なら大丈夫」という返事だけを返して黙ってしまふ。

そして、追っ手が居ないとわかれば緊張の糸は切れ、プリクラについてテンションの上がつた初春による冒頭にあつた佐天への説教へとシフトしていったのだつた。

「ちょっと待つて下さい。　いまから白井さんに電話しちゃいます」

御坂との電話には緊張感があるからか、話なれた白井に電話をかける初春をみながらも、この電話に白井も御坂も出ることはないだろうなと佐天は腕を組んでいた。

真実は頭が回りきつていなかった白井の不幸際でしかなかったが、置いてきぼりにされた佐天からすればお嬢様学校の2人が内申やら何やらのマイナス査定を避けるため、低レベルの学校に通う佐天と初春を捨てて逃げ出した風にしか見えていなかったのだ。

だから、今は電話に出ないだろう。次に初春が風紀委員支部で白井と会うときは、白井に「その時は電波が云々」と言われお茶を

濁されるだろうと考えていた。

「あつ！ 白井さんですか！」

「え？」

思わず佐天の口から驚きの声が漏れた。

あくまで不幸なすれ違いの出来事でしかないのだが、佐天からしてみれば切り捨てられたと考えていたので、こうしてすぐに電話にでももらえるとは想像もできなかったのだ。

だが、この驚きはそれだけではない。

「あれあれ？ こんな場所に女の子が来ちゃいけないよ」

「そうそう、怖い人に財布とかを盗られちゃうぜ」

前後の道を塞ぐように、前から3人と後ろから2人の計5人の不良学生が佐天と初春を囲むかたちで現れたのだ。

いきなりの展開に頭がゆっくりと追いつき始め、危つく口から漏れそうになっていた舌打ちを飲み込むことに成功する。 どうにも先程のゲームセンターからのダッシュも含め、精神的に色々ときているようだった。

もしもまかり間違つて舌打ちなんかをしようものなら、今は遊んでいる相手が即座に行動をおこしただろう。 その時の被害者は、間抜けな私だけではなく初春もだ。

だから慎重にと心がけ、ナイフを弄びながらゆっくりと包囲を狭めてくる不良から初春を守るように立ち尽くす。 既に1対1の状況下における初春の対人戦闘力は確認済みであり、結果から考えて本人には悪いが1対多という最悪の状況で勝つなんて夢のまた夢とあっていいだろう。

数日前の焼き直しといえはそれまでだが、焼き直しという言葉を使うには難易度が段違い過ぎて現実味が薄い。だがしかし、そんな風に思考放棄をしようにも初春の携帯から『初春？ 聞いてますの初春！』と白井の声が微かに響き、嫌でもこの状況に現実感を与えていく。

……逃げないといけない。

安全に完全に完璧に、逃げ切らないといけない。

前も後ろも塞がれてどうやって逃げる？

人数だって倍半分も違うし、今居ない2人は人数に数えない方がいい。

私が唯一相手に勝っているのは、自らのもつ亜人が目に見えない事であるが、目に見えないだけで勝てるならレベル5は全員視覚に何らかの影響を与える能力者だけになるだろう。

相手が私たちに求めているのは、財布に入った現金だろう。流石に学園都市のセキュリティをかくぐってカードを使えるとは思えない。

静かにゆっくりと佐天はポケットに手を入ると、そのままずりりと財布を取り出していく。最終的に佐天が出した結論は、お金よりも身の安全である。

こっそりと不良に屈する事を渋る初春にも財布を出すように促し、ちらりと2人しか居ない後方へ視線を向ける。そこには、手に入った金で何をするかという雑談を続ける2人が居て、佐天は亜人も使ってその2人に財布を投げる事で突破しようと考えていた。

幸運にも、突破した次の角を右に曲がれば大通りに近かったのが走っている時に見えて、自分のルート選択に運が無いと少し嘆いたところだったのだ。

しかしながら、そんな浅知恵は使われる事なく終わる。いや、別段佐天の知恵がないというわけではない。前提条件が崩れた為、行動に移る前に二の足を踏んだだけだ。

「ところでよ、今時のガキはもうあそこは経験済みだと思うか？」

「いいね、賭けるか？ 負けた奴は今回の金は無しだぜ」

突破しようと熱くなっていた思考が急に冷め、さつと自分の顔色が悪くなるのが佐天にはわかった。

いやらしい笑みを浮かべて近寄って来る不良が求める品目に、自分達の身体が入った事を理解したのだ。さつきまでは、現金目当てだから財布をぶつけて逃げれば、それなりに逃げる事はできたかもしれない。

しかし、私と初春も戦利品になった今は逃げ切れる自信は無い。

最悪の状況だと思っていたのが、気付いたら最低の状況までおまけに着いてきたみたいだ。自分も初春も足が震えてるのがわかる。

こんな最低最悪の現状を壊せるのは、ヒーローしか居ないだろう

…… 当然、そんな存在が本当に居れば、だが。

6 話（後書き）

感想ありがとうございます

ご意見ご感想に限らず、誤字脱字や違和感があればご報告下さい

7話

全力で路地裏を走っていた御坂は、急に視界がぶれたかと思えば目の前に壁があり、いきなりすることに驚いてぶつかりそうになった体を止めようと両手を突き出して何とか激突を免れた。

しかしながら、両手を突き出してしまえば当然のように担いでいた筈の白井は支えを失い、潰れたカエルのような「ぐえっ」という乙女らしからぬ声を出して後頭部から地面に落ちた。如何にゲコ太が好きな御坂だとしても、こんなカエルがストライクゾーンに掠ることすらあり得なかった。

「って、何してんのよあんだ！」

まだ酩酊状態から抜けられず緩みきった表情を浮かべる白井の胸ぐらを掴むと、ファミレスでの初春を彷彿とさせるシェイクによって頭を叩き起こそうとする。

現状は理解すれば理解するほど最悪であり、これは御坂美琴という性格からしてあつてはならない事である。

白井からすれば頭がパーの状態だった時に、御坂に担がれてとけそうな意識でなんとか逃げてる事だけを汲み取り、演算能力の都合でそこまで遠くはないが空間移動をして御坂を助けただけである。

だが、焦っていたとはいえ正常だった御坂からしてみれば、自分だけが2人の友達を見捨てて白井の空間移動で逃げ出したとしか受けとれず、逃げなくていいからむしろ戻せと白井の頭をシェイクする。

「うひゃあ…… お姉様あ」

「い？い？か？ら、起きろ黒子！」

御坂はどちらかと言われれば、良い意味でも悪い意味でも断然前向きに考えて行動する少女である。

例えば目の前で白井がこんな状態になっているのは、元を質せば御坂の電撃を食らったからであるのだが、今現在御坂の思考には慣れ親しみ過ぎたせいで電気への恐怖感が無くなり、記憶喪失よろしく『電撃でこうなったのなら電撃で』という言葉がリフレインしている。

とけた表情が一変し、全身を電撃が貫く感覚に白井は表情を崩す。やけつくような痺れが指先から爪先まで通り抜け、一般人ならば治るものも治らないような状況である。

しかし、白井黒子という少女はそんな一般人に収まる人物ではなかった。御坂が電撃使い故に電撃に慣れすぎてしまったとするならば

「お姉様の愛を感じますわ！」

白井は電撃をくらい過ぎて体が慣れてしまった、とびきりの変態だったのだ。

とにかく、正気に戻った白井はきよろきよろと周囲を見回し、近くに御坂が居る事に感動するが今ひとつ何かが物足りない気がしてきた。

何かが足りない。そう、何かが足りないというところまではわかるのだが、何が足りないのかへは辿り着かない。

くまなく自身をチェックし、全身を駆け巡る過剰に近いお姉様エナジーに動揺しつつ、覚えのない後頭部のコブを撫でてからポンと手を叩いた。

「はて……　　そういえば、初春と佐天さんが居りませんわね」

「そうなのよ！ だから、早く元居た場所に戻しなさい！」

いつも以上に近づけられた御坂の顔にどぎまぎしながらも、そもそもゲームセンターを出た辺りから記憶が曖昧になっているのに氣付いてしまう。困ったことになった…… お姉様に言われた通り戻ろうにも、そこがどこだかわからなければ戻りようがない。

お姉様の頼みすら満足にこなせないとは一生の不覚とばかりに落ち込むが、そこでふと戻る必要が無いんじゃないかと考えついた。

「あの、お姉様」

「いいから、早く戻しなさいよ」

「そうではなくてですね、戻るくらいならばお2人が今居る場所へ飛んだ方が効率的ではないかと」

それを聞いて御坂は顔を顰め、どこに居るかもわからない相手とどうやって合流するんだと先を促す。

苛々がみてとれる御坂に対し、白井は自分が先程までそうであった事を全て棚に上げて、焦るあまり御坂が少しアホの子になっているなと心底惚れなおしながら思っていたのだが、これは御坂の精神衛生上知るべきではない。

「いえ、ですから」

そこまで口にしてから、かつこよくキメ台詞を言う瞬間に白井の携帯が着信音を喚き散らすことで、持ち主に電話がきたことを精一杯に伝え始めた。

着信相手の名前を見ると二重の意味で出鼻を挫かれるが、とにかく御坂のポイントを稼ぐべく締まらないが携帯を晒して笑みを溢す。

「知らないなら場所を聞けばいいんですよ」

そう言うってから、納得いったとばかりに手を叩く御坂を流し見て、鳴り止まない携帯を耳に当てる。

『あつ！ 白井さんですか！』

「そんな大声ださなくても、聞こえてますわ初春」

スピーカーから聞こえてくる元気を乗り越して少しうるさい声に眉根を寄せつつも、内心逆にそのいつも通りの体温に若干の嬉しさがこみあげてくる。

今更この程度のことですら自分と初春の信頼関係に罅が入るとは思っていないが、それでも白井は御坂の話聞いて多少なりとも置いてきぼりにした事に罪悪感を感じていたのだ。だからもし、ここで変によそよそしい声を出されでもしたらどうしようとならない心配をしていたが、よかった杞憂だったと安堵してから『初春の癖にわたくしを心配させるなんて』と照れ隠しなのかわからない理不尽な怒りも抱えていた。

とはいえ、白井が初春にまず言うべきは1つである。

「その、わたくしも気が動転していたと申しますか、お姉様に酔っていたと申しますか…… 初春と佐天さんのお2人を置いて空間移動した事は、大変申し訳なく思ってますの」

気恥ずかしさを押し隠し、出来る限り素っ気なく努めて冷静な口調で話す。

これは、如何にさりげなくできるかが肝心だ。微かに、繊細に、そしてさりげなく言ってしまうのだ！

「本当に申し訳ありません」

言った！

とうとう言った！ 罪悪感からできるかぎり最上級の謝罪を、しかしさりげなく会話に挟んで謝れた！

声や表情が筒抜けなこともあり、目の前では御坂が苦笑しているのに気付かないくらい謝罪に傾注していた白井だったが、御坂から見てわかる程に緊張していた顔が途端に怪訝な表情へと変貌していく。

『……………』

「って、ちょっと初春？　なんで無反応なんですの？」

いつも空間移動に使う天才的な頭脳をフル回転させ、自分の謝罪に対して初春が如何な反応をしようと呼応できるよう、既に何通りものパターンのシミュレートを頭で済ませて準備は万全だった。

一番高い可能性を弾き出したのは、初春の事だから何の謝罪かを理解できずに流して終わらさうというもので、他にはデザートを要求されるか常盤台の寮へ来たいと言われる等で、低い確率で最初は聞こえないふりをしてもう一度大声で言っで欲しいと要求されることだったが、それにしては反応が遅すぎる。

何故こんな目にとばかりに不安がつっていき、こちらから電話をかけて無視して出ないならまだしも、自分から電話してきて無言は勘弁して欲しい。

『う、…わ…人に　いと…れ…ぜ』

「もしもし？　誰か居るんですの？」

微かにマイクが雑音を拾っているのか、何かが聞こえてきていた。だが、初春があちらでハンスフリー設定にしたのか、一瞬で雑音は人間の声に変化し折半詰まったあちらの現状を嫌というほど伝えてきた。

『財布2つと女2人と考えれば、今日は大漁ってやつか？』

『何言ってんだ馬鹿野郎、これくらいの女になればやりまくりだろうから金は俺の総取りだぜ』

『学校で売女のなりかたでも教わってるってか？』

スピーカーから聞こえてきた野卑た声に、沸々と沸き上がる怒りが抑えきれず御坂は俯いた。タイミングも何も関係ない、自分がゲームセンターで不要に電撃を使ったことが引金になり、初春と佐天が危地に立たされているんだと自分を責める。

『てめえ！ なに携帯弄ってやがんだ！』

『きゃあ！？』

『ういは ……』

鈍い音とともに携帯が地面に落ちる音がスピーカーから聞こえると、そこで携帯が壊されたのかスピーカーから音が消えた。

普通の人間だったならば、もう路地裏を片端から探しまわる以外に手はないだろう。もしくは、風紀委員なり警備員に電話をするだけで精一杯かもしれない。

しかし、しかしだ。ここにいるのは学園都市230万人の頂点

に立っているレベル5の1人であり、学園都市ではありきたりな能力である電気の汎用性からレベル5の第三位に位置する御坂美琴である。

「見つけたあ！」

この周囲のビルを含めた路地裏で、無線機器から電波を発していたのは1285台。そのうち携帯電話から電話の電波を発していたのは41台で、たったいま電波が切られたのは1台のみ！

「お姉様！」

両脇の壁をレールに見立て、電気を無理矢理流す事で自分の体を引っ張って行くように制御する。単純に走るより頭を酷使するが、レベル5の演算能力を持つてすればマラソンより少し疲れる程度の疲労感で、マラソンに倍する速度を叩き出せる。

絶叫マシンのように狭い路地裏を右へ左へ進み、その角を曲がった場所こそが携帯電話の電波が切られた場所だった。

現場では意識の無い初春と、お腹を抱えて踞る佐天の2人が倒れていた。

不良が無抵抗な少女を殴った理由は単純明快で、初春は携帯を使って助けを呼ぼうとしたから殴り、佐天は何もしていないが何かされると面倒だから殴っただけである。まあ、気絶している方が今までの経験から運びやすいというものもあるのだが。

殴られた佐天は込み上げる吐き気を抑え、舌を嚙んで飛びそうになる意識を懸命に留めていた。肉体的には失神した方が痛みがなくて楽になれるのだが、目が覚めたらここは何処？ というのも嫌だったし、そもそもこんな不良相手に目を離すなんて事が絶対に嫌だった。

チャンスさえあれば初春だけでも助けたいが、当の初春は既に失

神していて初春だけを助けるのは難しい。だからといって、初春を捨てて自分だけ逃げるだなんて選択肢をとれるほど佐天は強くなかった。

それならどうすればいいか？

簡単な話だ。初春飾利を助けてから佐天涙子が逃げればいいだけである。

そんなことは絶対に無理だと理解しながらも、佐天はそんな無理に対する対案がないので絶望的な笑みを浮かべていた。

8話

不良達からすれば、ちょっとばかり殴ったくらいで無様に這いつくばる獲物でしかない佐天が、無様でも無様なりに一念発起した事に気付いた人間はいない。

なにせ、それを目指そうと佐天が画策したところで現実は何も変わらないからだ。

願っただけで力が増えるはずもなく、そもそもそれを成し遂げる道筋すら想像できはなかった。得体の知れない力ならば持っていたが、こんな重大な場面だからこそ信頼のおけないような力を使う決断力も佐天にはない。

早くも飛びそうになる意識が弱気にさせるのか、『初春飾利を助けてから佐天涙子が逃げる』という目標が『初春飾利と佐天涙子を誰かが助けて逃げる』という受動的なものに切り替わりそうである。ヒーローが居るなら助けてみる。囚われのヒロインとはいかないが、囚われの市民（女）なら2人もここに居るぞ。

だがまあ、願っても念じててもヒーローは影も形も現れることはない。ヒーローというものは居ないのが相場で、だからこそ幻想で輝く存在なのだ。

「俺はもっと、こう…… ばいんばいんなのが好きなんだがなあ」

「だったら犯らないで見てていいぞ？」

「それとこれは話が別だろ。じゃあ、ちゃっちゃと運んでお楽しみといこうか」

近寄って来た不良の肩に米俵のように担がれ、内心お姫様抱っこじゃなくてよかったとは思うが、それを安堵できるような状況では

ない。

何処へ行くのかはわからないが、チャンスがあるとすれば大通りに近づいた時に悲鳴をあげるくらいだろうか？　そういう意味では幸いなことに、不良は佐天の意識が残っていることに気付いていなかった。

新たな決意を胸に秘めてバレないように薄目を開けて周囲を見回していた時、佐天は初めてそれに気付いた。　周りの不良達にバレないような微かに開けている薄目でしかないのに、周囲が網目模様になが綺麗に見回す事ができたのだ。

果然と周囲を見回し、不良に担がれた自分が見えたことに驚いて飛び上がりそうになるのをなんとか抑え、誰にも気付かれずそこに浮いている亜人を見つめる。　佐天の視界には亜人が写っているが、佐天の感覚的な視界には担がれた佐天涙子が写っていたのだ。

感覚的な視界は良好とは言えない。　それはそうだ、亜人の両目はまるで縫われたように閉じているのだから。

それに、何故か世界がゆっくり動いているように見えてしまい、自身の視界と亜人の視界では時間の進みが違うのではないかとばかりに、凄く酔いそうになってしまう。

いま見えている世界も、亜人が見ている世界も同じ世界である以上1秒は同じ1秒でしかない。　ただ、その同じ1秒でも亜人の1秒は何倍にも引き延ばす余裕が感じられ、それは亜人に拳を虚空で振らせた時に顕著な違いを見せた。

余りの速さから閃光のように、佐天の視点では気付いたら拳が前に突き出されていたが、当の亜人視点では普通に拳が突き出されただけでしかなく、伸ばされていく腕の動きすら見えるほど1秒を長く感じるのに佐天視点でも亜人視点でも腕が伸びるのは同時だったのだ。

込み上げてくる痛みとは別種の吐き気に、佐天はかなり手を焼きながらも亜人の視界を動かすことで、ついにそれを発見した。　それは光っていた。

それは少し回転していた。

それは白熱していた。

それは溶解していた。

そして、それはどう見てもコインだった。

ローレンツ力によって過剰なまでに運動量与えられたコインは、自らの速度と空気の摩擦に悲鳴をあげるように白熱し、そして溶解しながらもまっすぐゆっくりと進んでいた。

佐天の視界には掠れるほどにも見えなかったコインは、しかし亜人の視界からはゆっくりとコインの模様から文字まで見えるほどの差異がありながらも、こうしてどちらの視界からも同時に消えていった。

コインが消えたと同時に、進行方向からはドンともガンともとれる爆音とともに何かが倒壊する音が聞こえてくる。

「な、なんだ!？」

「危ねえ!」

音に驚いて佐天もそちらを向いてしまいが、今の不良達にそれを見咎める余裕は存在せず、佐天とともに路地裏を塞ぐように倒壊していく非常階段を呆然と眺める事しかできなかった。

すると、佐天の感覚的な視界にそれが見えてきた。

光る何かが空を飛んでくる。先程のコインと比べれば圧倒的に遅いが、それでも自分が全力で走るより断然速いのがわかる。

ビルの合間を飛びながら近付いてくる何かが、人間の形をしているのが段々と見えてきた。

その服装もその顔も知っている。自分達を見捨てた…… いや、自分達を見捨てていなかった少女である。

前方に超電磁砲を撃って足止めをした御坂は、速度からくる運動量を止めるべく地面に飛び降りると、ローファアが悲鳴がわりに煙

をあげるのを無視して踵に全体重をかけて止まった。

ゴムの焼ける臭いが充満するなかで、目の前には進路を潰されて立ち竦む不良が5人と、荷物のように担がれた初春と佐天の2人がいた。

「な、なんなんだよてめえは！」

不良達のリーダー格の男　更柵皿太が動揺を隠せず叫ぶが、その言葉の1つ1つが御坂にとって火に油を注ぐようなものでしかない。

「あんたたち……私の友達に手を出して、無事に帰れると思うてるんじゃないでしょうね？」

御坂に睨まれて更柵は1歩後ずさる。

更柵の率いる不良達は、この辺りでは名の知れた集団であった。

彼等は負けた事がない訳ではないが、余り負けたことはないことで有名だったのだ。

では、彼等は特別強いのだろうか？

いや違う。リーダーの更柵を含め全員が無能力者でしかなく、人数も5人で特別強いわけではない。

他の不良より特別更柵の目鼻が利いただけであり、強きを感じたら逃げて弱きを見ては襲っていただけである。だから大きな負けを喫した事がないのが更柵の小さなプライドだったが、目の前に居る少女1人に脳内では最大級の警鐘が鳴らされ、今すぐにでもここから逃げ出したくなっていた。

とはいっても、今すぐにでもここから逃げ出したいのは全員の一致した考えだ。特別目鼻が利かなくとも、背後から非常階段が倒壊するほどの能力を見せられて、それほどの能力者を相手にして与し易いと思えるバカは居ないのだ。

「お、おい…… どうすんだよ」

「くそ忌々しいが、今回は逃げの一手しかねえな」

焦燥感を隠せずにこっそりとかけられた声に、苦々しい表情で更棚が答えてから周囲に電気をバチバチと撒き散らす少女に先手を打つべく声をかけた。

「わかった…… わかったわかった。ここは取引といこうじゃねえか」

「……………」

とりあえず、その取引内容を聞くべく御坂は無表情で先を促した。本来ならば今すぐにでも電撃をぶつけてやりたいのだが、初春と佐天が担がれている時点で御坂の取れる攻撃の幅は狭まっているのだ。

「こ、こつちには女が2人居るから、1人はいまここで解放する」

そう言つて更棚は近くで担がれていた佐天を奪つて自分で担ぐと、初春を担いでいた男に彼我の中間地点で初春を置くように言つてから行動させる。言われた方はおっかなびっくりそりそり前に進んで行き、初春を地面に横たえたと走つて戻り5人でできるだけ固まった。

解放された初春の元へ御坂は近付いていき、視線で佐天も解放すると伝えるがそれで解放するなら更棚は最初から2人とも解放していただろう。

「次は、お、お前がゆつくり後ろに下がれ。俺が担いでる女は、その角を左に曲がって大通りの手前になったら解放する」

更棚の考えはこうだ。人質になってる1人を解放して誠意をみせ、もう1人は袋小路から抜け出して解放すると言って大通り前で女を置いて逃げるというものだった。

流石に人の多い大通りで女を担いで逃げるなんて事は不可能だから、相手は手荒なことなく解放すると思うだろうし、女が居ればあんな能力で狙われることはない。となれば、後は大通りを散り散りに逃げれば尚更あんな能力を使えないだろうから、全員御用になることはない。

しかしながらこの時、更棚は2つ間違いを犯していた。

1つ目は現状では攻撃できないという観点で正しいが、御坂の能力が何かを飛ばして周囲を吹き飛ばすだけの荒い能力だと考えていたことだ。実際には超電磁砲は能力の応用でしかなく、細かい作業すらこなせるのだが佐天が捕まっている以上電撃を食らわせるわけにはいかず黙っているのだが、そんな繊細な作業ができるのならば非常階段を狙わずに自分達を狙っていると考えているのでしょうがないだろう。

そして、2つ目の間違いは致命的なものだった。

「でしたら」

「は？」

「佐天さんが居なければ、そんな取引は無効ですわね？」

相手が1人だけだと思っていたことこそが、全ての前提を覆す間違だったのだ。

まさに音もなく現れた白井によって、佐天は白井とともに御坂の

後方へと空間移動をしてしまふ。

これにより、更柵は袋小路からも抜け出せぬ内に人質という盾を失ったのだ。

そしてそんな状況になれば、選択肢は2つしかない。大人しくお縄につくか

「畜生！ 突っ込んで逃げるぞ！」

「う、うわああああ！」

無謀な突撃に活路を見出すかである。

せめて誰か1人くらい逃げられるだろうと考えていた更柵だったが、路地裏を津波のように打ち寄せる極大の電撃を見た瞬間に全てを諦め、全身の痺れとともに意識を失うのだった。

無然とした表情で倒れた不良5人組を見て鼻を鳴らした御坂は、ハッとしてから後ろを向いて白井に介抱されている佐天と初春に目を向けた。

「大丈夫？」

「ケホッ…… 前回よりは痛いです」

最後まで不良は気付いていなかったが、超電磁砲を撃つてからかなり佐天は活発に動いていたのを御坂は見えたので、心配そうな表情で佐天に声をかけたのだが返ってきた言葉に眉根を寄せた。

前回よりと言ったが、前回とは何だろうと思考して 思い出した。初めて御坂が佐天に会った時にかけた言葉は『大丈夫？』であり、確かにこの言葉は2回目だ。

「囚われのヒロインって…… 柄じゃなかったんですけど。 それ

に……　しても、ヒロインがヒロインに助……　けられる物語は、どこに向かうんでしょうね？」

痛みに麻痺する意識の中で、要領を得ない意味不明なことを呟いた佐天涙子の意識は、ゆっくりとゆっくりと闇に沈んでいくのだった。

9 話

今から1時間ほど前になるが、目覚めた佐天が最初に見たのは『知らない天井』と、自らの身に纏った『見たことのない服』だった。そんな潔癖症なまでに白い部屋と、ピンと皺なくのびたシーツが印象的な場所。そう、佐天の目が覚めたのは所謂病室だった。

病室に入って来た看護婦に声をかけて色々聞いてみれば、どうにも外は暗く時間も22時を回っているがまだ当日らしい。何でも仕切りの隣のベッドでは初春が寝ているらしく、今は安静に寝ては居るが目覚めた時の錯乱ぶりは酷かったようで、随分と看護婦はそれに手を焼かされたらしかった。

まあ、それはそうだ。佐天からしてみれば、ことの顛末を最後まで見届けてから意識をなくしていたのであり、こうして病室で目覚めても治療費がかかるくらい不安しかない。ちなみに治療費は白井と御坂の2人が折半して出すとの伝言を看護婦から貰ったが、あの状況で意識を失った初春が病室で目覚めれば錯乱するのは当然である。

とにかく、後遺症もないし検査は良好らしく、瘧も近日中には消えるとのことで晴れて明日には退院できると言われ、何かあったらナースコールで呼んでと言って看護婦は退室していった。

今の今まで寝ていたわけではなく意識を失っていたわけだが、こんな時間に起きてしまったのが運の尽きなのか眠気はなく、だからといって特別やれることがないのが病室である。

テレビだってあるにはあるが、視聴時間によって後から金銭を要求してくるので観る気にはなれず、ため息を吐いてベッドから降りて仕切りのカーテンをずらして隣のベッドを覗き込む。

するとそこには、すやすやと眠る初春が居たので安堵する。無事だというのはわかっていたし、無事だというのはきかされていたけれど、やはりそれを確認するまでは微かながら不安があったのだ。

「初春…… よかった」

それにしても、検査入院とはいえこの短期間で初春は既に2度目の入院であり、もしかしたらクラスで初春に病弱設定でもついてしまっているんじゃないかと心配になる。 実際には病からの入院ではなく両方とも怪我の入院だったが、そんなものはクラスメートからすれば関係ないことだろう。

もとより初春はPCが大好きなインドア派で、しかも運動神経はからきしのもやしっ娘である。 そういう意味では病弱設定が作られる下地は完璧だと言っている。

「むう」

病弱設定がついても、なんだか初春らしいと感じてしまうのは初春の人徳の学なせる業か。

それにしても園都市での犯罪率はわからないが、今の初春の犯罪遭遇率は悲惨な数値を叩き出していることは容易に想像できる。不幸と言ったかなんと…… 能力が定温でなく攻撃に特化した上で御坂のように強ければ、上がった犯罪遭遇率だけ検挙率が上がるのにと益体もない考えが過る。

ちなみに、手持ちぶさただったので初春の頬をむにむにしたり、なんとなく頭を撫でていたのだがそれにも飽きてベッドに戻る。

ベッドに寝転がれば頭に浮かんでくるのは、あの忌々しく禍々しい自身の力である。 今日初めて視覚が共有できることを知ったが、あの亜人は本当になんなのだろうか？

自分以外の誰にも見る事ができず、学園都市が誇る 底辺向けに最新鋭機材を使っているかは甚だ疑問だが 各種測定機材からも検出されないが、それでもそこに存在している力。

あれはいつたい…… と、そこまで考えてから佐天は小さく舌打

ちした。

最近自分自身が最も否定したい部分についてよく考えてしまうが、それでは元も子もないのである。考えて感じて観測してしまえば虚構すら存在を与えてしまう……元はと言えば奪われた側である私が、この亜人に与えるべきは爪の垢すら持ち合わせていないことを忘れてはならない。

だから虚構が現実に滲み出る前に、佐天は亜人に対する考察を霧散させた。つまらない話だが、『我思う、ゆえに我あり』という言葉は逆説的捉えた結果『我思わぬ、ゆえに我なし』に至り、いつもの考えず感じなければ存在しないという答えを得る。

「ふわぁ……」

久しぶりに頭を使いすぎたからか、脳が反乱を企てたのか眠気が襲ってくる。

襲い来る眠気に身を委ね、寝る子は育つという格言を信じて佐天は夢の世界へと旅立つのだった。

あふれる笑顔と輝く笑顔。美しさの中でも原初から存在する1つのそれは、しかし少女に笑みを与えることはない。

それは顔を黒く塗り潰された父親、顔を黒く塗り潰された母親、顔を黒く塗り潰された娘、顔を黒く塗り潰された息子と名も無き黒子による醜悪な喜劇。

甘美なる善意に溶け込んだ癒しという酒盃を飲み下す少女の瞳は硝子玉のように美しく、そして硝子玉ゆえに何も写り込むことはない。

例えば小さな娘を抱き上げる母親の姿も、小さな娘に泣かれて右往左往する父親の姿も、小さな娘が新たに産まれた弟に感極まる姿

も、小さな弟が一生懸命に姉を追いかける姿も、そのどれもがコーラルをふんだんに塗りつけたように黒く、そして神経を逆撫ですることだけに重点をおいたような劇画調で描かれており、少女の心には何も響くことがない。

どうせこの物語がどうなるかなんて、飽きるほど見せられてきた少女にとって面白いものでもなんでもない。 ちよっとした悲喜劇が起きるだけの話だ。

起きるだけの話なのだが、珍しく今日は途中で物語は打ち切りのようだ。 今日も騒々しい1日を楽しもうじゃないか。

昨日は寮の門限もあつて意識を取り戻す前に帰らざるを得なかったこともあり、今日はこうして病院が面会を開く朝一に来てみたわけだが。

「まだ寝てますのね」

「それは、考えて、なかったかなあ……」

予定外と言うべきか当たり前と言うべきか、早い時間に着いたのならば寝ているということもある。

だが困った…… 相手は問題はないと医者に言われているが、怪我人だから起こすにも気が引けると御坂は腕を組んで悩んでいたのだが、それも隣から聞こえてきた声によって吹き飛ばされた。

「ちよっと初春、お姉様が態々お見舞いに来たのに寝てるなんて！ 起きてくださいまし！」

「ちよ、黒子なにやってるのよ！」

隣にいた筈の黒子は消えていて、気付いたら何故か仕切りのカーテンを取っ払って初春のベッドで馬乗り状態になり、寝ている静かに初春の頬を引っ張り始めたのだ。

いきなりの行為に御坂は驚愕しつつも声を出すが、それに返ってきたのは至極真つ当なものだった。

「いえ、でしたらわたくしたちはどうするんですの？」

「へ？」

「ですから目的の2人が眠っている間、わたくしたちは……はっ！ も、もしかして、お姉様は黒子と2人きりの時間を大切にしたいと、そうおっしゃってくださるのですわね！」

急にスイッチが入ったように暴走する白井に御坂は頭を抱えながら いや、抱えようとした瞬間には白井が初春の上から空間移動を使い、既に自身の真上で抱きつく体勢をとっていたので「んなわけあるか！」と迎撃して叩き落としていた。

いつも通りと言えば、過剰すぎるスキンシップがいつも通りという事実に関が痛くなるが、いつも通り飛んできた白井を床に沈めた訳だが場所がいつも通りではないことを失念していた。

「んっ…… うう」

「……あ」

ベッドで寝ていた初春を起こそうとしていた白井を止めた御坂が、間抜けにも 白井が悪いととれるが 飛んできた白井を床に落とした音によって、ベッドで寝ていた佐天を起こしてしまったの

だった。

そんな目覚めかけた佐天の意識が整う前に、圧倒的な速さで立ち上がっていた白井は自身の口元を抑え、優雅な流し目を御坂に向けつつ寝起きの佐天に口を開いた。

「あらあら、おはようございます佐天さん。駄目じゃないですかお姉様ったら……病室ではお静かに」

「そ、そそ、そうね。起こしちゃってごめんね佐天さん」

たしかに初春を起こすなと注意したのは御坂であり、それを口にした御坂が不運とはいえ佐天を起こしたとなれば、多少の屈辱は免れ、免れま……ぐう！

世界的な通例として事実と感情は相容れ難いものであり、御坂の心の内では『そもそもあんたのせいだ！』という怒りと、ここは病院でもあるし『ゲームセンターの教訓を思い出して我慢よ美琴！』という反省がせめぎあった結果、どうやら御坂は反省する女だったらしく帯電することなくにこやかに佐天に謝罪した。

その笑みを流し目とはいえ直視した白井は、恐怖のあまり冷や汗が滝のように流れていたのだが、幸運にもそんな敵意は白井にしか向いていなかったために佐天にはその笑顔がなんの心労にもなることはなかった。

「おはようございます。って、あれ？御坂さんに白井さん？」

寝起きでぼやぼやした頭を懸命に回し、何とか佐天が絞り出した言葉は疑問符だらけであった。とはいえ、学園都市での一人暮らしに慣れた佐天からしてみれば、朝起きたら誰かが居るというのは逆に久しぶり過ぎて慣れなかったのだ。

そして、それは当然ながら佐天だけのことではない。

「んん…… ふわあ。 おはようございま…… ってあれ、白井さん！ みつみみ御坂さんまひゃあ！？」

目覚めの挨拶とともに周囲を見回し、白井と御坂の存在を確認した初春は楽しそうに動揺して慌てると、勢いよく立ち上がろうとして慣れない病院服の裾を踏むと、そのまま誰が止める間もなく病室の床へと顔からダイブして行った。

この行動を誰の手を借りるでもなく1人でやり遂げた初春は、額をしたたかに打ったのかおでこを紅くしつつ、今度こそ立ち上がった朝の挨拶をした。

「お、おはようございまむがつ?!」

いや、舌を噛んで正しく挨拶できなかった。

こんな初春を見た3人の脳裏には、本人が聞けば泣いて悲しむような評価がよぎっていた。そう、全てを1人でやり遂げた初春を見て『1人で楽しそうだな』と。

色々といっぱいっぱいの初春にはそれが気づけなかったが、これは本当によかったのかもしれない。

9 話（後書き）

新たな評価ありがとうございます
みなさんからの感想や評価の1つ1つが作者のやる気につながります！

10話

目の前のそれを見て、まだ自分が夢の中の住人ではないかと疑った佐天は、静かに右腕をつねってから表情を固くした。

学園都市に行き着いた者は、皆なにかしらについての格付けを余儀なくされる。例えばそれが研究者ならば、その研究でレベル5を生み出せたかやその研究で如何に優秀な論文を発表したかであり、学生ならば自らの能力レベルやスポーツ系学校ならば運動神経、芸術系学校ならば感性といった部分で格付けされていく。

そして、この学園都市における差別化と言っても過言ではないほどまでに強力な拘束力をもつものこそ、学園都市が全力で開発を続けている能力者としてのレベルによる格付けである。

能力レベルによる格付けは、学園都市にカースト制度に近い残酷で巨大なヒエラルキーによる三角形を形成していた。共通しているのはどの階層の住人も例外はあれど、上を妬み下を見下して自らの階層から1つでも上を求めつつも、登りきれずに折れていくことだった。

そんな能力という何よりも雄弁に語る階層において、最底辺といえるレベル0の無能力者である佐天と、能力は使えるが何ら役に立たないレベル1の初春に向けて、それこそ上から数えた方が早い大能力者であるレベル4な白井と、学園都市230万人の中で7人しか居ない超能力者であるレベル5の御坂が頭を下げているのである。ブラックジョークでもっとましなものを考えるだろうし、現実にしては亜空間の彼方まで吹き飛んだ内容だとは言えない。

「そそ、そんな、白井さんや御坂さんが謝らなくても」

レベルの高い者がレベルの低い者を見下し、ましてや無能力者に価値を見いださないのが学園都市の一般的な風潮である。そんな

学園都市に流れる風潮のご多分に漏れず、私達の通う柵川中学も全員が全員そうだとは言えないながらも、能力レベルによるわだかまりは少ない。

私と初春のようにお互い仲の良い間柄の者も居れば、能力があるが故に下を見下す事で自分の立場を確認する者や、そんな上に対して反発する者も当然いる。

そんな風潮にどっぷり漬かりこんでいた人間に、この光景を見せたらなんと口にするだろうか？ 上位は下位を見下して当たり前であり、下位は上位から舐められて当たり前前の学園都市で、学園都市の最上位の人間が最下位の人間に向けて頭を下げている光景はどう映るだろうか？

とりあえず言えるのは、当事者とも言える初春はわたたと両手を振り回し、とにかく頭を上げてくれと慌てるだけであり、もう一人の当事者である佐天は理解が追い付かずに呆けるだけである。

「あの…… どうして」

「へ？」

「どうして、謝るんですか？」

目をぱちくりさせるヒエラルキーの最上位に位置する御坂に向けて、ヒエラルキー最下位に位置する人間を代表して佐天は尋ねていた。

だが、それこそ御坂の性格からすれば心外な部分である。御坂美琴にとって重要なのは能力の有無でも能力の強度でもなく、その人物が自分と友人であるのかや、直接的な友人でなくとも相手の人格を考慮するといった学園都市の色眼鏡によらない価値観だった。

「だって、あの時私がもっと平静だったなら、後ろから佐天さんを呼び止めて4人で空間移動できてたんだから……」それがだきなか

ったせいで2人が怪我したんなら、謝るのは当然じゃない」

少しばかり恐縮そうながらも全くの真顔で御坂にそう言い切られ、逆に佐天の困惑が色濃く現れてくる。

まだ御坂の人となりはわからないが、最初こそ対外的なパフォーマンスを理由にした謝罪かと思っていた無能力者の佐天に対して、どうやら超能力者の御坂が本気で謝っているのだということが理解できた。そして、その謝罪側には白井も含まれている。

ここまでくれば、疑り深いというよりも学園都市の風潮が染み付いていた佐天でも、目の前で頭を下げた2人が本気で謝っていたのだということが理解できた。

それさえ理解できれば後は早く、特別謝罪を固辞する理由もないのでその謝罪を受けたところで、病室に飾られた時計を見た白井が「2時限目には出ないといけませんの」と言ったので、今日はここで解散となった。ちなみに、事前に御坂や白井の話もあつて風紀委員が動き、柵川中学へは今日1日佐天と初春が休養も兼ねて休む旨を伝えてあるらしい。

もう一度だけ謝罪し、そのまま白井の能力によつて消えた2人を確認した初春の動きは、先程の間抜けぶりを払拭するほど速かった。隣のベッドに居た佐天の元へ押し掛けると、両目をキラキラさせて自分が意識を失っていた時に起きていた事件のあらましを聞こうとしたのだ。

当然ながらそれを聞かれた佐天は渋った。そもそも謝罪の際に事の顛末は白井によつて、それこそ相手のリーダーが更柵皿太という名前で、部下もろとも逮捕したという詳細は聞かされている。

だから聞き漏らしがあるならば、今ここで自分に聞かず風紀委員の支部で調べた方がいいと佐天は言っただが、残念ながら初春の求めていた内容はそういった事務的な話ではない。

「御坂さんの活躍について聞かせて下さい！」

「ああ……　そういう事ね」

要するに御坂がどれほど格好よく自分達を助けたのか、それが聞きたいらしい。　時計を見れば朝の検査までまだ時間があるので、それまでの暇潰しだと佐天はゆっくり思い出しながら口を開いた。

さて、少し時を巻き戻そう。

ここは学園都市の中央に位置する第7学区にある、所謂下から数えた方が早い1つの中学校。　能力開発というよりは能力の理論について重きを置いた、言ってしまうえば落ちこぼれ用の学校である。　そんな中学校の教室は、ホームルームが始まる前から軽い騒乱が起きていた。

「聞いたか？」

「聞いた聞いた！」

「マジで転校生が来るんだって！」

要するに男女問わず、今日来るであろう転校生が気になっているのだ。

事の発端は日直だった彼が朝早く学校に着いて廊下を歩いていると、自分達のクラスの担任が廊下で見知らぬ女子と会話しているのを発見し、偶然にも日直は音に関する微細な能力を持っていたのでそれを行使した結果、会話の端々から「今日からクラスに」だの「僕が担任の」だのという言葉を目ざとく拾ったのだった。

担任に事実関係を聞けばいいというのに、彼の中ではもう転校生

がクラスメートになるのは決定事項とでも言うかのようにクラスで言いふらし、こうしてクラスをあげてお祭り騒ぎをしていたのだ。そんな騒ぎを知らない担任と転校生は、教室に近づくにつれてうるさくなる喧騒に顔を顰めつつも、こうして教室の前に到着していた。

「じゃあ、僕が呼ぶまでここで待っていてくれるかな」

「わかりました」

教室の戸を開けて「うるさいぞー」と注意する担任の背を見ながら、転校生は本当に疲れたようなため息を吐いた。こうして自身がここに居るのも因果なものである。

やりたいかと言われれば全くその気がないわけじゃないし、だからといって今の自分にそんな資格があるとは口が裂けても言えない。楽な内容だから楽しんでこいとも言われたが、こんな間抜けな制約を受けてしまえば心に小さな穴が開いたような不安がよぎる。

もう一度ため息を吐いた転校生は、壁を左手でコツコツと叩いてからどれだけ幸せを逃がしたかわからないが再度ため息を吐いた。過去の軌跡をたどり頭の中では触れる筈のない左手が壁を叩き、とりあえず飲まされた錠剤が効いている事だけは理解する。

こんな薬を飲むくらいならば、やはり自分がここに来るべきじゃなかったなと考えて、今更無意味だと頭を振ってマイナス思考を吹き飛ばす。

教室の中からは日直の号令による朝の挨拶があり、タイミング的にはそろそろ出番が近付いているようだった。

「入って来て下さい」

「はい」

呼ばれたので戸を開き、前を向いて教室に入っていく。そんな全身に突き刺さるのは、視線視線視線視線視線……この程度で緊張できるほど自分は柔ではないが、それでも慣れない類いの視線は気分を萎えさせるには十分である。

この視線にはこちらを見下す嘲笑が入っていない。

この視線にはこちらを殺そうとする殺意が入っていない。

この視線にはこちらを利用する算段が入っていない。

そして、この視線には悪意も恐怖も慈悲も何もかもが入っておらず、存在するのはただ好奇心の1点だけである。

たしかにネジの飛んだ科学者は好奇心のこもった瞳で自分達を見ていたが、それでも侮蔑やら何やらといった感情が混在していたものだった。

「じゃあ、自己紹介として名前と能力と1言を」

「どうも、今日からこのクラスに来ました布旗最愛です。能力は空力使いのレベル1ですが、超よろしく願います」

さも当たり前のように絹旗は偽名を名乗ると、これも錠剤によって能力をほぼ使えないままを口にする。

名前は風紀委員の支部もあるので一応念を入れて偽名だが、今の能力がレベル1であることに嘘はない。錠剤にはどうやっているのか能力を使い難くなる効果があるらしく、未だ実験品段階ではないがここに来るにあたり常時発動している能力を止める為に高能力者での人体実験が目的だろうが送られて来たものである。

しかしながら効果はてきめんで、窒素装甲は見る影もないほどに弱まってしまっている。自力で空気中から窒素を選択して抜き取ることも、ましてやスプレーを使っても装甲を維持することすら不

可能であり、今の絹旗の全力は窒素っぽい空気を動かすので精一杯だった。

ちなみに、この錠剤の効き目は6時間程度は保つらしく、一応だ
が中和剤も渡されているので緊急時には対処可能である。

「それじゃあ、席は窓側の一番後ろの席に座って」

ちらりと生徒を見回すが、目的の人物が見つからない。同じク
ラスになるよう手配されている筈なので、自分の座る席の前に空い
た2つの内どちらかだと目星をつけて、ゆっくり絹旗は席に向かっ
た。

席に座った絹旗の携帯がメールの着信を知らせたので、こっそり
開いて『フレンダ』の名前に微妙な表情を見せる。

そもそも絹旗がここに居るのは、結局会議で滝壺がまた「フレン
ダの胸なら行ける」と口走ったせいでフレンダが暴走し、居ない麦
野の胸や目の前に居る滝壺の胸に絶望してから「ちゅ、中学校なん
て結局絹旗が行けばいい訳よ！」と泣きながらファミレスから出て
いってしまったため、今更ながら滝壺がそれに同意して絹旗が来る
事になった訳なのだから。

10話（後書き）

感想ありがとうございます
疑問や批判なども受け付けていますので、何かありましたら気軽に書き込んでください

11話

2時間目の授業も終わり、観察対象が来ないならば本格的に帰りたいなと絹旗の思考がループを始めていた頃、病院での検査を済ませた佐天は初春の流石に風紀委員から休養云々の働きかけがあったのに遊ぶのは不味いという提案から、寄り道もせずに自分の部屋へと直帰していた。

朝の検査は大変だった…… いや、朝の検査が始まるまでは大変だった。

自分達を助けた御坂の活躍を妄想していたのか、どうだっただろうだったと気色ばむ初春に押され、気付いたら大袈裟に説明し過ぎて自分でも『そんなシーンあったかな?』というものにまで膨れ上がってしまったのだ。これは余談だが、收拾のつかなくなった物語は御坂と白井によるドラゴン退治に行き着いて、やっと異変に気付いた初春によって止められてしまった。

それはともかく、部屋に帰った佐天はやる事もないので、初春や白井とまではいかないがああ時の御坂に想いをさせる。ありきたりな話になるが、佐天は御坂の超電磁砲を見て電撃使い繋がりというわけではないながらも、全身にまさに電撃が流れたような衝撃を受けた。

この感情は言葉にしづらく、もしも佐天が女ではなく異性だったならば恋と呼んだかもしれないし、初春だったら羨望と呼んだかもしれない。まあ、白井は御坂と同姓ながらも真顔で愛だ恋だと断言するのだろう。

しかし、当事者の佐天からすればそのどれもが遠いものだとしてしまふ。

別に御坂の能力だけに拘らない人柄は、少し生意気を言うようだが嫌いじゃない。今の御坂がレベル5という学園都市最上位であり、能力だけに拘った人物だとしたら誰とも付き合えないという前

提条件があつたとしても、だ。

だけど、その感情は愛のように御坂に惹かれて止まないものであるわけではないし、羨望にしては後ろめたい感情が強すぎる。

後ろめたい…… そう、後ろめたいのだ。 今更佐天は自分が殊更頭がいいとは思っておらず、あの時の御坂がどうやってあれを成したのか理解できるほど頭脳明晰ではない。

しかしながら、『どうやった』という部分が抜け落ちていたとしても、その結果として『どうなった』という観測結果を理解できる要領はある。

「コイン…… だったよね」

呟きながら手にしたコインを弄ぶが、あの時に見たコインとは彫られた柄が違う他のゲームセンターのコインである。 何のへんてつもないコインでしかないが、このコインが あれは全くの別物かもしれないが レベル5である御坂の手にかければ、それこそ非常階段であれば軽く碎ける力になる。

今まで短いながらも生きてきて、今日になって初めて勉強を真面目にしていなかったことを悔やんだが、微かな記憶をたどるかぎり『力』とは『速さ』と『質量』によってもたらされた筈である。

厳密には硬さといった諸々の要素も関わってくるが、それは今の佐天に重要なものではない。

弄っていたコインを指で弾き、その軽さに嘆息する。 穴だらけの理論を使うのなら、これに『力』を加えるには『質量』の不足を補って余りある圧倒的な『速さ』が必要になる。 これを聞いた初春がしきりにそれが超電磁砲だと口にしていたが、この力こそが御坂のトレードマークということらしい。

学園都市には様々な能力を持った学生が居るが、その誰もが不可能の領分をもっている。 それは別に発火能力者に見事電撃を扱ってみるという無理難題ではなく、自分の能力であるかという些細な

ものを無視して、見ただけで「これは不可能だ」と思わせ、絶望させ妬ませ羨望させる領域。超電磁砲はそこに位置している。

どんな美辞麗句でも語れぬ威力をもった超電磁砲を見て、ご多分に漏れず佐天も魅力されてしまった。と、ここだけを見れば羨望のそれでしかないのだが、同時に暗い感情も浮かんできた。

あれほどの威力を持った超電磁砲は、それを見てしまった学生を魅せるだろう。そして、矮小な自分の能力と比べて圧倒されるだろう。端的に言ってしまうと、「アレに比べたら自分の能力は無いに等しい」と。

この「無いに等しい」というキーワードは、佐天に力を与えてくれる希望の言葉であった。心の奥底に「無いに等しい」という言葉に希望を感じる理由は、その存在を認めているからだという燦りを押し隠しつつ。

「……本当になんなんだろ」

誰にも見えず感じられない力。存在だけを異常だと捉えていた佐天に突きつけられたのは、遠見か何かともとれる視界の共有と、超電磁砲の説明でした『質量』の不足を補って余りある圧倒的な『速さ』の根幹である『速さ』を捉える異常な動体視力。

この能力が使えるか使えないかはまだまだ段階を10も20も飛び越えた先の話でしかないが、今までの意志だけ抑えられないほどに異質さと疑念だけが大きくなっていく。

だが、こちらも筋金入りである。大きく膨らむ疑念をがんじ絡めに縛りつけ、無意識下でこれ以上自分の力について考えないように動きだし、冷蔵庫を開けて絶句する。

「昼はなんとかなりそうだけど、そう言えば買い物に行ってなかった」

意識は既に異質な亜人から、今日のご飯へと矛先がすぐ替わってしまっている。

小さく…… 本当に小さくだが、自分の口からホッとした一息が出た事に佐天が気付くことはなかった。

難しいようできてつまらなそうな、されど好奇心を疑惑で塗り潰したような笑みを顔に刻みながら、1人の大柄な男がそこに立っていた。

周囲には夕食の買い出しの為に何人もの学生が、手に取った品々を吟味しては籠に入れていく。そう、ここはスーパーの一角である。

「しかし、あれが……」

口の端を吊り上げさせながらポツリと言葉を漏らす男の視線は、真剣な表情でにんじんの品定めをしている少女へ向いている。ここで出会う予定はなかったし、そもそも接触は控えるようにと言われていたので、あくまで今は観察に留めている。

男の脳裏に浮かんでいる3枚の重要事項の内、目の前の少女について記された内容を思い浮かべる。何でも彼女は曰く付きのいや、アレに目をつけられている時点で曰くを付けられている原石らしい。

資料を調べれば誰もその原石としての能力を見ていないし、今までの身体検査で何の反応も確認されていないわけだが、アレが言うからには事実なんだろう。信用できないという意味では同じだが、嘘は言っても間違いを言わないという事に関しては、唯一男がアレを信頼していた。

しかしながら、それでも彼女にどれほどの価値があるのか理解が

及ばないが、態々裏に色々とけしかける程の価値がアレ曰く「第3次ないし第4次の保険」にはあるらしい。

同じ原石でありながらレベル5の第七位である削板軍霸を見ていれば、原石のふざけた性能の一端は男にも理解できるしアレもまだ原石だと明言していないが、異能をかき消すということんでも現象を巻き起こす。正確には起きているとんでも現象を消しているのだが。幻想殺しこと上条当麻も存在している。

そういった意味からすれば、原石というだけで価値ははねあがるのだろう。だが、原石だという価値だけで両手を挙げて喜ぶほどアレは安くない。

何かが……必ず本人が使うのか利用されるだけなのかはわからないが、必ずあの少女にはアレが動くだけの価値が存在している。今更墮ちるだけ墮ちた自分が言っても笑い話にしかないが、少なくともアレ以外の人間がそれを見極めてやるのも救いになるだろう。

男が何を考えて居るかは知らず、背後からの視線を感じた少女
佐天はじゃがいもを片手に後ろを振り向く。

しかし、夕暮れ時のスーパ―は人の動きが多く誰が自分を見ていたかわからないが、それでも一瞬だけ佐天はそこに居た大柄の男と目が合ったような気がした。服装はアロハシャツのボタンは開けっ放しという少しばかり目のやり場に困る格好で、サングラスをしていたから確信は持てないが自分が自意識過剰でないかぎり、そんな男と目が合った気がした。

とはいえ、人混みに流されて居なくなってしまった相手など思考から消し、手にしたじゃがいもを籠に入れると特売品を見て決めた今晚のカレーの具材を求めてスーパ―を歩きだした。

こちらに興味を無くし、買い物続きの始めた少女を見て男
土御門元春は、不意に目は合ったがそれは何の支障もない事だと考えながら、脳裏に浮かんでいる残りの2枚の重要事項を思い浮かべる。

1枚はまさに学生の本分と言える勉強についてで、担任の小萌により土御門を含めた成績のよろしくない生徒へ、愛をこめた宿題が与えられていたのだ。お世辞にも科学的な方面に頭が良くない土御門としては、『どうやって水は流れているのか』という問題よりも、『どうやって水を流せば運がよくなるのか』という問題ならば100点を叩き出せると愚痴るばかりである。

それはともかく、残念ながら本日土御門の予定に宿題をやる暇などは1分1秒たりともありはしない。何故ならば、今日は義妹である舞夏が部屋に来て料理を、自分のためだけに料理を作ってくれるのだ！

通っている高校でも有名だが、土御門の思考は義妹に染まると他の何もかもが追い出されるのである。

「今日は舞夏の中華コースなんだぜい」

中華！ そう中華料理だ！ かわいい義妹がメイド服で中華料理を作るのだ！ その姿を想像しただけで1年は戦える！

飛躍に飛躍を重ねた土御門の妄想は、既に最後の1枚である義妹の舞夏に頼まれていた、中華料理を作るにあたっての買い出し食材メモを駆逐する勢いである。

今の土御門の脳裏はまさにこの世の天国であり、古今東西和洋折衷お構い無しに料理を作ってくれる義妹に悶えている場面なのだが、だからこそそれはタイミングが悪かった。

隣を通ろうとした男子の買い物籠が土御門にぶつかり、思考の空白があつたせいでもよけた土御門が倒れそうになる寸前に、それに手をついてしまったのだ。

「あ、安いにゃー」

特売だったのかいつもとは明らかに違う価格設定に、まだ少しば

かりふわふわしている土御門の脳内がそれと先程の少女の買い物籠の中身を結びつけてしまったのだ。

ここまでタイミングが悪ければもう遅い。寮に帰った土御門が買い物袋を舞夏に渡し、たんこぶをつくった土御門と舞夏が2人でカレーを食べたのは別の話である。

11話（後書き）

感想ありがとうございます
批評から疑問まで随時受け付けてますので、何かありましたら感想へ書き込んでください

12話

部屋にけたたましく鳴り響くのは、今日も勤勉にも同じ時間に労働を始める目覚まし時計の音だった。

人間は慣れる生き物であり、何度も何度も同じ時間に目覚ましをかければそれに慣れていき、ある日を境に目覚ましは鳴って起きるのではなく目覚ましを止めるために起きるようになる。

今の佐天はまさにそれで、目覚ましは鳴る3分ほど前に目が覚めているのだがベッドでもぞもぞと時間を潰し、目覚まし時計がけたましく鳴り響く瞬間に叩いて止めた。目覚まし時計は保険という意味合いもあるが、既に朝の儀式に近いものがあるのだ。

目覚まし時計を止めた佐天は、そのまま上半身をベッドから起こしてまだ頭がむにやむにやする中で目尻を擦り、右手を天に突きだすように腕を挙げながら背筋を伸ばす。口から意識せずに「むーっ」という声が漏れるが、誰が見ているという訳でもないので問題ない。

朝起きてからの佐天は少し忙しい。朝ごはんはカレーを温めて食べたり、顔を洗ったり歯を磨いたりと身だしなみを整えたり、更には今日の授業の時間割に合わせた準備まで必要なのだ。

これだけの作業を済ませ、時計を見てから扉を施錠すればいつもの登校時間である。

通学路もいつも通り変わらず、学校に着いても慣れた手順をなぞるように玄関で靴を履き替えると、真っ直ぐに教室へ向かって行く。まだまだ朝のホームルームまでは時間的な余裕があるため、教室に入った佐天の目に映るのはめいめいが自由にグループを作り、やれ昨日のテレビがと話していたり――のCDがもうすぐ発売という話で盛り上がっているが、そんな中で何人か佐天に気付いたのか挨拶をしてきたので挨拶を返すのもいつも通りである。

とりあえず自分の机に荷物を置くべく歩いていき、少しばかり違

和感を感じながらもいつも通り窓側最後列の机に座り、鞆を横にかけるとぐでつと前屈みに潰れる。

「もうすぐか……」

カレンダーが示す今日の日付は7/13であり、もうすぐ待ちに待った夏休みである。だが、その夏休みが楽しい夏休みになるか、学生の本分をまっとうする夏休みになるかは期末試験次第である。

勉強に関しては個人の努力で結果は変化するが、問題は期末試験と平行しておこなわれる期末身体検査である。これは個人の努力如何でどうなるものではないし、そもそも佐天としては能力が上がる気も上げる気もからきしなのに、身体検査でよろしくない結果をみせた生徒は夏休みに追加課題を拝領しなければならないのだ。別に好きではない追加課題を貰わなきゃならないというのは、悲しいことに確定事項だった。

「あの」

そういえば、今日は珍しく初春が遅い。もう後10分で朝のホームルームが開始するのだが、まだ来る様子がない。

「あの」

窓のそとは快晴であるが、天気予報では夕方に通り雨が降るらしい。雲一つ無いので信じがたい天気予報とはいえ、外とは違い学園都市の『天気予報』はむしろ『天気予言』や『天気予告』に近く、的中率はなんと100%という驚異的な数値を叩き出している。

これも一重に学園都市の科学力の結晶である『樹形図の設計者』の恩恵らしいが、授業でも習った通り佐天には凄すぎて逆に説明が難しい。

「あの！　そこは超私の席なんですが」

「ひゃっ?!」

完全に意識していなかった耳元で大声を出され、机をひっくり返さんばかりに驚いて立ち上がる。　驚くあまり不注意で隣の誰か記憶が正しければクラスメートじゃない　へ勢いよくぶつかってしまった。

「きゃ！」

まさかいきなりぶつかられるとは予想していなかった絹旗だが、驚くだけで案山子になっていたら今まで生きてこれなかったとばかりに、自身と佐天の間に受け止めるための窒素装甲を生みだそうとして、そよ風しか生まれなかった結果として、佐天に押し倒されつつ内心舌打ちした。

昨日今日の付き合いではなく、それこそ生死をわかつ鉄火場をともにした能力である。　故にあつて当然、故にできて当然というのは脊髄反射の領域まで刷り込まれており、こうして薬の効果を忘れて無様にも床を転がっている。

もともと戦闘を前提とした仕事じゃないからこそ、なんの戸惑いもなく絹旗は能力を抑える薬を飲んでいるのだが、それでもこれが今まで暗部で買ってきた怨みからの犯行だったならば、間抜け面を晒して今頃死体処理班に片付けられているだろう。

「おはようございます。　って、な、何してるんですか佐天さん！」

いつもより眠い目をこすりながら、こうして今しがた教室に入ってきた初春の目に最初に飛び込んできた情景は、初春目線で見れば

佐天が見知らぬ誰かと取っ組み合いをしているような構図だった。

喧嘩は風紀委員として いや、佐天の友人として止めるべきだと慌てるだけ慌て、しかしここでこそ頑張るべきだと意気込む。

とはいえそもそも喧嘩などは起きておらず、床に倒れた佐天は急いで立ち上がり、押し倒してしまった相手へ手を差し伸べた。

「ご、ごめん。 えっと、大丈夫？」

「いきなり押し倒されて驚きましたが、私は超大丈夫です」

差し出された手を掴み、引つ張り上げられるように起こされると、強かに打っていたお尻についた埃をばんぼんと払う。 どうやって観察対象と接触すべきか考えていたところで、こうして予定外とはいえ相手から接触してきたのは行幸だ。

そんな思考の海に潜りながらも、絹旗を立ち上がらせた佐天の方はと言えば、今までの会話を頭で整理してこの自分と同じスカートとは思えない改造のなされた少女は転校生だと気付き、喧嘩じゃないならよかったですと2つ前の席に座る初春を見てから、慌てて鞆を1つ前の机に移動させて席をあけた。

さて、任務達成の為に首尾よく観察対象と接触した絹旗は、あいた席に座ってからこちらを窺う佐天の顔を見てから思ってもみなかった現実には戦慄する。 ここに転校してからまだ1日であり、絹旗はまだ佐天とどう接触すべきかと苦慮していた段階であり、接触したその後の考慮へは未だ至っていないかったのだ。

せっかく接触したのに、何事もなく別れてしまうのは損でしかないと考えた絹旗は、とりあえずありきたりな挨拶から始めることにした。

「……おはようございます」

「お、おはようございます」

固かった。朝の爽やかな陽気をかき消すくらいには固かった。今の自分を見たらフレンドはどう思うだろうか？ たぶん顎が外れるくらい啞然とするか、顎が外れるくらい笑い転げるかのどちらかだろう。

麦野やフレンドに「適当に仲良くなつて聞きだしてこい」と言われたのだが、これが「適当にぶつ飛ばして聞きだしてこい」なら得意だと言えるというのにと観察対象に愚痴りたくなってくる。

忘れてはいけないが、そもそも絹旗には今でこそ『アイテム』という仲間がいるが、学園都市に着いた当初は置き去りとしてであり、その後も暗闇の五月計画に巻き込まれる形で脳を弄くり回されていたりと、所謂真つ当に誰かと友人関係を育むといった経験が少ないのだ。それもあって、中学生として潜入すると決まってからも、フレンドが潰れて滝壺が同意するまでは、自分が適任だとは思わず自薦すらしていなかった。

そんなこんなで悩む絹旗に、佐天は佐天で戦々恐々としていた。なんといつても、間違つて机を占領していた拳句に、不可抗力というの言い訳にしかないが、相手を突飛ばすように押し倒してしまったのだ。

誰がどう聞いても悪いのは佐天であり、転校生にとって初対面である佐天の評価は最悪と言えるだろう。そんな相手が少しばかり難しい顔で 実際は絹旗は絹旗でいっぱいいっぱいなのだが佐天視点ではそう見える 腕を組んでこちらを見ていれば、嫌でも緊張するというものである。

「えっと、佐天さんがおいたしてごめんなさいね。別に佐天さんに悪気があった訳じゃないので、その、私も謝りますから布旗さんも佐天さんを許してあげてもらえますか？」

重苦しい空気にたえかね、割って入ってきた初春は話を纏めるべく動き出す。

いつの間に隣に来ていたのかポンと肩に手を置かれ、すらすらとそう言つてのける初春を見て、佐天としては「私のお母さんか」と口にしようとしたのだが、ふとそこで記憶の中の母親という存在にそんな事を言われた事を思い出せず黙りこむ。

もとより、擁護に動いてくれた初春に文句を言えるほど、佐天は他人を信用していないわけではない。

現にそんな初春を見て転校生　布旗というらしい　は呆れともとれる微妙な表情を浮かべ、先程までの表情を緩和させて佐天を見ているの。　ただし、この表情の理由は絹旗がもう破れかぶれで行くしかないという、あまりにも内容のない決心をした結果の表情であつた。

ちなみに、佐天も佐天でそんな布旗に安堵の表情を浮かべつつ、如何に隣でいい笑顔を浮かべている初春に対して、こつ的確に仕返しというか照れ隠しというか諸々の想いを込めて何かしてやろうと考え、余談だが今初春は不幸にも昼休みになった時にスカートを捲られる運命が決まつたのである。　にこにこと笑みを浮かべる初春も、昼休みには羞恥に頬を染める事になると思つまい。

「その、痛い所とかない？」

「特に怪我もないですし、体は超大丈夫です」

裏であれこれやっていれば痛みが無い訳じゃないが、ある程度の痛みは慣れもあつてか我慢することができる。

かの最強たる『一方通行』を完全に模倣する計画も蓋を開けてみれば失敗でしかなく、それなりの成果を上げた絹旗でさえ室素を大気中から選別し、それを身に纏うことで擬似的に『一方通行』のような壁を作っているに過ぎない。

結局疑似でしかないそれはベクトル操作による反射ができず、周囲を固める窒素の壁にぶつかったベクトルは当然外に逃げるようなこともなく、貫通こそはしないものの逃れようもない運動エネルギーを使って頭をシェイクしてくる。

今のところ命に関わることはなかったが、だからといって痛みがなかった訳でもない。避けることも簡単だが、防御力のない後衛を守る為には積極的に避けることもできない上に、麦野の高すぎる迎撃能力から自分達の身や任務を守るべく攻撃を誘引しないとならない。

下手に麦野に攻撃された場合、敵を殲滅した結果防衛すべき施設が半壊する事などざらなのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6228q/>

とある原石の幽波紋

2011年5月31日13時19分発行